東方表裏録

mag

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方表裏録

【Ｎコード】
Ｎ８６３５Ｗ

【作者名】
ｍａｇ

【あらすじ】
幻想入りしてしまった男が幻想郷でのほほんと暮らしたり暮らさなかったり、異変にかかわったりかかわらなかったり、元の世界になんとかして帰ろうとする話。偶に原作のセリフを少し変えて使うことがあります。

表一回目（前書き）

自己満足の駄文ですがそれでもよろしければどうぞ。

表一回目

「彼女を助けて！！」

誰かの切羽詰まった声が聞こえる。

男はその声の原因を知っている。しかしそれは男には関係ないし、わざわざ自分の命を危険にさらしてまでかかわるほど男はお人よしではないのでこの状況を俯瞰することにした。

……はずだった。

そう…男の意思とは無関係に体は動いてしまった。

人が一年間のうちに交通事故にあう確率は約０．９％、一生を８０年と仮定した場合事故にあう確率は５３％らしい。この数字が高いか低いかは人によって感じ方が違うだろう。問題なのは……

今目の前に迫っているトラックである。

トラックの運転手は長距離を運転してきたのか知らないがうつらうつらと船を漕いでおりこちらに気付く様子はない。

……いや、仮に気付いたとしてももう遅いだろう。

（目が覚めたら病院のベットの上だといいが…これは死ぬだろうな。
…せめてもの救いは突き飛ばした女の子が助かることか…。）

男はそんなことを思いながら目をつむると意識が落ちるのを感じた。

「……不思議なこともあるわね。」

不可解なつぶやきとともに…。

表一回目（後書き）

この小説を見てくれ・・・どう思う？

すごく…短いです…。

裏一回目（前書き）

おそらく最初で最後のオリ妖怪。

裏一回目

ここは幻想郷のある森の奥深く、そこに二人の…いや二妖怪が話していた・

「ようこそ我が森へ、境界の妖怪。わざわざこんな辺鄙なところへ来てもらってすまんねぇ。」

木の形をした妖怪がもう片方の妖怪に語りかける。

「要件は何？こう見えて私昼寝するのに忙しいのよ。（訳：さっさとしろよ。おまえに構ってる暇なんかねぇんだよ。）」

一見美人だが胡散臭そうな妖怪が答える。

「なぁに簡単なことじゃよ。外に世界からちいさなおなごを連れてきてほしいのじゃ。」

その答えを聞いて境界の妖怪と呼ばれたモノが扇で口元を隠しながら言う。

「…どうして？私の記憶が正しければこの前一人連れてきたはずだけど、人面樹さん？（訳：ボケたかじじい？人みたいな顔しやがって。）」

人面樹と呼ばれた妖怪はその人のような顔をゆがませた。

「それがのぅ主がこの前連れてきた男じゃが、外では自殺志願者というのかの？襲っても食べても何の反応もなくてつまらなかったわい。わしらは妖怪じゃからのぅ…。妖怪の賢者さんなら分かってもらえるとおもうのじゃが。（訳：もっと生きのいい人間連れてこい。賢い者なんだろうが、それぐらいわかれ。）」

「それが要件？ならもう帰るわね。外から連れてくる人間もその期間も決めてるの。自殺志願者、助からない遭難者、不慮の事故で死ぬのが確実な者。まぁ他にもあるけどあなたには関係ないわ。（訳：いちいち文句いってんじゃねぇよ。こっちにはこっちの事情があるんだよ。）」

「ふむぅ。それなら仕方ないの。……ただ、もしかしたら偶然この森に迷い込んだ人里のおなごが偶然どこぞの妖怪に襲われてしまうかも知れんがそれも仕方のないことよ。（訳：要望を飲まないなら人里のおなごを襲うからな。）」

「そしたらあなたは偶然何者かに退治されるかもしれないけど、それも仕方のないことよね。（訳：やってみろよその前にお前を殺してやるから。）」

「わしが退治されてしまったら、この《あらゆる植物を操る程度の能力》で今現在人里に供給している野菜や果物がなくなってしまう

がそれでも退治されてしまうのかのぅ。（訳：やれるものならやってみろよ、困るのはそっちだろ。）」

境界の妖怪…八雲紫は少し何かを考えるそぶりを見せてから溜息をついた。

「…はぁ。わかったわ、ただし今回だけにして頂戴。」

「さすが妖怪の賢者、話がわかるのぅ。ちいさなおなごは今回だけじゃ。」

（…人面樹はそろそろ切り捨てるべきかもしれないわね。）

（小さなおなごはの……）

「それじゃ外の世界から連れて来るわね。くれぐれも人里には…」

「大丈夫じゃ、わかっておる。生きのいいのを頼むぞ」

こうして森の奥での話し合いは終了した。

しかし、この妖怪たちはまだ知らない。この行動が幻想郷に新たな変化をもたらすことを…

裏一回目（後書き）

訳＝エキサイト翻訳とでも思っといてください。

表二回目

男が目を覚ますと目の前にはさまざまな植物生い茂っていた。立ち上がり周りを見渡すと彼はおもむろにポケットから携帯電話と音楽プレイヤーを取り出し、右腕につけている腕時計の針が指している時間を比べた。

（日付は変わっておらず、すべてが１３時を指している。ふむ…どれも壊れてはいない。携帯は県外か…。そして車に轢かれてから３０分たっているのか。…いやちょっと待てよ。）

男は思い出す、気を失う『前』に起こったことを。

（…そう気を失う『前』に気を失うのを『感じた』んだ。。怪我もしていない、トラックの衝撃も感じなかった。）

男は確認する、周囲の『状況』を。

（気を失った場所から３０分で行ける範囲にこんな場所はない。現代の移動手段では…。森の奥深くみたいだが…周りに『自然に実っている果物』があるな。『苺、西瓜、蜜柑』ときたか。どれも食べごろみたいだな。）

男は受け入れる、『状況』からそれらの『事実』を。

（トラックには轢かれていなかった、だが『何か』が原因で気を失ってしまったこと。これが一つ目の『事実』。二つ目の事実、それは、今いる場所が『常識ではありえない世界』であること。なぜならこの目の前にある果物たち…これらは普通『同時』には実らないものたちだ。なのに、人の手が加えられた形跡もないのに実っている。…わかることはこれくらいだな、『何か』や『この世界』についてはいくらでも邪推はできるが今はそんな場合じゃない。大事なのはどんな事実でも受け入れ、そして…）

そして男は考える、『事実』から次に『すべきこと』を。

（見ず知らずの土地、いや世界で生き残るにはまず…。）

「やれやれ、妖怪の賢者め…、ちいさなおなごと言ったはずじゃがのぅ。」

表二回目（後書き）

作者は頭がよろしくないので穴も多いと思いますがなにとぞご容赦を…ｏｒｚ

裏二回目

Ｓｉｄｅ　人面樹

妖怪が人間を襲っていたのは恐れが必要だったから…。

恐れがなければ妖怪は存在できない…。

それを知らなくとも本能で理解していた…。

恐れがなくば、ただの幻想…。

だから今、わしは幻想郷にいる…。

外の世界では木の模様が人の顔に見えるだけとなったのじゃから…。

すべてを受け入れる幻想郷…

ここでは消える心配はない、人間を襲う必要もない。

…現に人間を襲わない妖怪も知っておる。

そう…人間を襲わない…妖…怪……

……く、くく、

ふっ、ふふ、

…ハーハッハッ！！

笑いが止まらんの！人間を襲わない？なぜ、ナゼ。なぜ？何故！！！！

何故あんな楽しいことをやめてしまうのじゃ！？

あの恐怖に歪む顔！！

泣き叫ぶ声！

肉を裂き、骨を砕く感触、音。

これだけはやめられんのぅ。

…おや？いつの間にかわしの森に何か入ってきておる。

動いてなかったから気づかんかったわい。境界の妖怪め、なかなか仕事が早いじゃないか。

今度は楽しめるとよいがのぅ。

ちいさなおなごよ待っておれ、今わしが迎えに行くからの。

裏二回目（後書き）

人面樹の森は魔法の森ではありません。

次話は裏三回目になります。

裏三回目

Ｓｉｄｅ　人面樹

確かわしの根の反応があったのはここらへんじゃったが…。

……見つけたがこれは…。

「やれやれ、妖怪の賢者め…、ちいさなおなごと言ったはずじゃがのぅ。」

そこにいたのはおなごでもなく、ちいさくもない成人した男だった。

「おぬしは前に殺した奴と違って楽しませてくれるか？外の世界から連れてこられた人間よ。」

すると男はやっと今の自分の状況を理解し始めたのか、今まで無表情だった顔が恐怖に染まり、後ずさりながら声にならない声をあげた。

「○△■×☆？」

人面樹は男の反応とは対照的に満面の笑みを浮かべる。

「いいのぅいいのぅ、その反応。わしはそれが見たかったんじゃ。」

「な、なんなんだよあんた！？」

妙に強がっておるがその強がりをはがしてやるのもまた一興。

「わしか？ふむ、知ったところで意味はないぞ。わしがおぬしを惨たらしく痛めつけた後、殺してしまうからの。」

「お、俺なんか食べてもおいしくないぞ。」

「食べるんじゃない。ただおぬしの反応を楽しむために殺すのじゃよ。」

「ど、どうしたら助けてくれるだ…？」

「おぬし頭悪いのぅ…。最初から殺すと言うておろうに。」

「…っ！！」

…逃げようとしておるの。下半身に力が入っていってるのがまる分かりじゃ。

「ふ、ふざけ…！？」

その言葉を言い終わらないうちにツタで男の手足を縛る。

おぉ、見事に転倒したの。

その拍子に男の手からなにか落ちたのぅ、…いつのまに手に持っておったんじゃ？まぁよい。

「■○☆☆△！■○☆☆△！」

拾ってはみたが、いったいなんなんじゃこれは？小さな板？が何かしゃべっておる。

「やめろ！彼女に触るんじゃない！！デッドツリーもそんなことを言うな！頼むから…。」

彼女？でっどつりー？……くくく、そうか、強がっていたのはそういことか。ならこれを利用しない手はないのぅ。

「のぅ…おぬし、ずいぶんとこ奴にご執心みたいじゃの？さっきまでの強がりはどうした？」

そういって板を持っているツタの力を強める。

「やめるんだ！！僕はどうなってもいい！！どんなにひどいことされたって構わないから彼女だけは傷つけないでくれ！」

ツタを必死に解こうとしながら男は懇願する。

「必死じゃのぅ。だがその行動はわしを喜ばせるだけじゃぞ。…これはわしの推測なのじゃがこの小さな板、おぬしの大切な人なのじゃろ？でっどつりーというのは彼女の名前。どうしてこのような姿になっておるのかは分からんが、事情があるのじゃろ？そしてうまくしゃべれてないのはその姿のせい、違うか？」

男は何かに耐えるように小さく頷いた。

「…そうだ。よくわかったな…。」

「そこそこ長く生きておるからの。…でだ、今のままだとわしがおぬしらを殺して終わりなのじゃが…。」

もちろんそんなもったいないことはしない。

「……。頼む、彼女だけは…。」

「おぬしに助かる機会をやろう。」

「機…会…？」

「そう機会。おぬしら二人が助かる機会じゃ。」

「！！」

目に希望の光が戻ってきたの。くっくく。

「人里に行って子供を二人さらってこい。」

「そんなことできるわけないじゃないか！！」

「できないなら二人ともここで死ぬだけじゃな。」

「…っく。どうしてあんた自身がいかないんだ？」

「ちょっとした理由があるんじゃよ。」

「ちょっとした理由？」

「…どうでもよいことじゃ。それよりどうするのじゃ？ここでむざむざ殺されるのか？それともどんなことをしてでも生き残る道を選ぶのか？」

「…人里から子供を二人、攫ってくればいいんだな。だったら早く

人里への道を教えてくれ。」

「英断じゃな。人里へは実がなってない木を辿って進んでいけばよい。半日も歩けば着くじゃろう。」

「…彼女は連れていけないんだな。」

「人質代わりじゃよ。なぁにちゃんと子供を攫ってくれば返そうぞ。期限三日じゃ、それまでに戻ってこなかったらわかるじゃろ？」

「分かった。このツタを解いてくれ、時間がおしい。」

…ふっきれたようじゃな。ツタは…これで外れたの。

「生きのいい子供を期待しておるぞ。」

「……。」

行きおったか…。

楽しみじゃの

子ども連れて来た瞬間に

この人質を殺すのが

裏三回目（後書き）

ご都合主義上等です

次話は主人公視点でこの場面をば…

表三回目

（見ず知らずの土地、いや世界で生き残るにはまず…。）

ガザガサッ

男の後ろから何かが這ってくる音が聞こえる。

「やれやれ、『妖怪の賢者』め…、『ちいさなおなご』と言ったはずじゃがのぅ。」

（『日本語』を話せるのか…ありがたいな。これで判断材料を増やすことができる。）

男が振り返るとそこには人間の顔の模様がある木の形をした何かが近寄ってきた。

（……こういう種族がたくさんいる世界なのか？しゃべって動かなければただの木なんだがな。人の顔に見える木なんて元の世界にたくさんあるし。）

男は観察する。これが自分にとって厄をもたらすのか、幸を呼ぶの

かを知るために。

「おぬしは『前に殺した奴』と違って『楽しませて』くれるか？『外の世界』から『連れてこられた』『人間』よ。」

（なるほど、どうやら自分は今命の危機にさらされているらしい。……だったら死なないための布石を投じておく必要があるな。）

男はあたかも状況を理解し始めて怯えるフリをする。相手の望む反応を、『楽しませて』あげるために震えた声で。

「Ｗｈａｔ　ｄｏ　ｙｏｕ　ｋｎｏｗ　ｏｕｒ　ｗｏｒｌｄｓ？」

（訳：あんたは外の世界の何をしっているんだ？）

「いいのぅいいのぅ、その反応。わしはそれが見たかったんじゃ。」

（そういう反応をするのか…。だったらなんとかなるな、こっちの演技にも気づけてないようだし。）

人面樹が男は反応を楽しんでいる間に男は人面樹の反応を試す。

この一人と一妖怪の状況は表から見たならば妖怪側がイニシアティブをとっているように見えるだろうが、裏から見るとまるで違う。

「な、なんなんだよあんた！？」

男は人面樹を欺き、少しでも情報を得ようとしている。

「わしか？ふむ、知ったところで意味はないぞ。わしがおぬしを惨たらしく痛めつけた後、殺してしまうからの。」

（まだだ、まだ布石を投じ切っていない。）

「お、俺なんか食べてもおいしくないぞ。」

（もっと油断しろ。）

「食べるんじゃない。ただおぬしの反応を楽しむために殺すのじゃよ。」

（もっと慢心しろ。）

「ど、どうしたら助けてくれるだ…？」

（もっと呆れろ。）

「おぬし頭悪いのぅ…。最初から殺すと言うておろうに。」

そしてあまりの男の理解の悪さに人面樹自身は気づいていないが気を抜いてしまった。

（……このタイミングで。）

だから、彼が後ろで何かしているのに気付けなかった。

（…よし、これで準備は終わった。あとは下半身に力を入れ、あたかも逃げようとすることを気づかせ…。）

「…っ！！」

（拘束してくるもか？それともこの行動を指摘して自分の動揺のフリを楽しむか？）

男は確信していた、人面樹は逃げ出そうとしても自分を簡単には殺さないことを。これまで彼が引き出した会話によって。

「ふ、ふざけ…！？」

（…ツタを操れるのか、いやあの果物もこいつが原因だとすると植物か？今考えることじゃないな。あとはこのボタンを押して無様に転ぶだけだ。）

無様に転び、手から落とす。

「Ｙｏｕ，ｖｅ　ｇｏｔ　ａ　ｍａｉｌ！Ｙｏｕ，ｖｅ　ｇｏｔ　ａ　ｍａｉｌ！」

携帯電話を

「やめろ！彼女に触るんじゃない！！デッドツリーもそんなことを言うな！頼むから…。」

男はあたかもそれが自分の大切な人であるかのように、その人が自分を庇おうとしてるかのように話す。

「のぅ…おぬし、ずいぶんとこ奴にご執心みたいじゃの？さっきまでの強がりはどうした？」

そういって人面樹は携帯電話を持っているツタの力を強める。

「やめるんだ！！僕はどうなってもいい！！どんなにひどいことされたって構わないから彼女だけは傷つけないでくれ！」

「必死じゃのぅ。だがその行動はわしを喜ばせるだけじゃぞ。…これはわしの推測なのじゃがこの小さな板、おぬしの大切な人なのじゃろ？でっどつりーというのは彼女の名前。どうしてこのような姿になっておるのかは分からんが、事情があるのじゃろ？そしてうまくしゃべれてないのはその姿のせい、違うか？」

（ミスリードにこれほど上手くかかると逆に怪しいが…。ダメだ、感情を顔に出すのはこの場面でもっともしてはいけないこと。）

「…そうだ。よくわかったな…。」

（逃げる算段がばれてるのならどのみち死ぬんだ。今はやるべきことをする。）

「そこそこ長く生きておるからの。…でだ、今のままだとわしがおぬしらを殺して終わりなのじゃが…。」

「……。頼む、彼女だけは…。」

（提示して来い。生き残る条件を、おまえがして欲しいことを。）

「おぬしに助かる機会をやろう。」

（『日本語』があって、『人間』を知っていて、『前にも殺した』ことがあるんだろう?。その言葉が本当ならこの世界にも人間かそれに準ずる者はいる。そして『ちいさなおなご』を殺したいんだろ?）

「機…会…?」

（なら、それ《携帯電話》を人質にして人間のいる場所を教え、攫ってくることを条件として突き付けろ）

「そう機会。おぬしら二人が助かる機会じゃ。」

「!!」

「人里に行って子供を二人さらってこい。」

（よし、人里があることが確認できた。死なない可能性も高くなった。）

「そんなことできるわけないじゃないか！！」

（簡単に飲んじゃいけない。楽しませるために葛藤する人間を演じないとな。）

「できないなら二人ともここで死ぬだけじゃな。」

（まだ聞きたいこともある。）

「…っく。どうしてあんた自身がいかないんだ？」

「ちょっとした理由があるんじゃよ。」

「ちょっとした理由？」

「…どうでもよいことじゃ。それよりどうするのじゃ？ここでむざむざ殺されるのか？それともどんなことをしてでも生き残る道を選ぶのか？」

（くくっ、つまり人里にはあんたを抑え込む抑止力があるわけか。それが分かれば十分だよ。）

「…人里から子供を二人、攫ってくればいいんだな。だったら早く人里への道を教えてくれ。」

「英断じゃな。人里へは実がなってない木を辿って進んでいけばよい。半日も歩けば着くじゃろう。」

（あんたは愚断だったな。せめて携帯電話のことをもう少し怪しむべきだった。まぁ口八丁でごまかすがな。）

「…彼女は連れていけないんだな。」

「人質代わりじゃよ。なぁにちゃんと子供を攫ってくれれば返そうぞ。期限三日じゃ、それまでに戻ってこなかったらわかるじゃろ？」

（三日…ね。時間の流れ方も同じみたいだな、空には雲も太陽もあるし。）

「分かった。このツタを解いてくれ、時間がおしい。」

（人里に行ってもっと情報を集めないといけないんだ。）

「生きのいい子供を期待しておるぞ。」

（……。）

「……。」

男は歩みだす。

想像もできない世界へ

ゆっくりだが着実に

（……なかなかおもしろい外来人を連れてきてしまったわね。）

表三回目（後書き）

文章力のなさと伏線の張り方の下手さに絶望する今日この頃。

ｄｅａｄ　ｔｒｅｅ　訳：枯れ木

表四回目

『黄昏』

人の姿が見分けにくく「誰そ彼」と尋ねるところから、夕方の薄暗い時間帯を指すようになった。

男が歩き続けてあたりはすっかり黄昏時、徐々に視界が悪くなり始めたので彼は適当な場所を見つけて今日はもう休むことにした。

彼の手には林檎が二つに梨が一つ。実がなっていない木の隣に見つけたので採っていたのだ。

…シャクッ、ムシャムシャ

（この林檎、みずみずしく、甘みもあってなかなかうまいな。外の世界のものよりかなり違うな。）

一泊する場所を見つけ木の下に座り込み、咀嚼しながらそんなことを思っていた。

「わたしのおなまえをおしりになりたいのでしょう～♪でもいまおもいだせなくてかなしいのです～♪

…あら、おいしそうな林檎。そこの通りすがりの人間さん、私(わたくし)にもおひとつ頂けるかしら？」

いきなり空間が裂け、男の目の前に上半身だけがその裂け目から出ている女性が現れた。

「…構いませんよ。『妖怪の賢者』さん。」

そう言ってもうひとつの林檎を差し出す。

「ふふふ…それが今の貴方にできるベストな返答よね。わたくしが妖怪の賢者ならいろいろと探りをいれることができるだろうし、そうでなくても妖怪の賢者についての情報を得られる可能性が高いものね。」

林檎を受け取り、妖しく微笑みながら男を見つめる。

（あの木の妖怪よりは賢いみたいだな。…それだけやっかいでもあるが。）

「妖怪の賢者について知りたがっていることを知っているんですね。（訳：つまりあんたは妖怪の賢者か、自分をこの世界に連れてきたことにかかわっているんだな）」

「ええ、私が妖怪の賢者、八雲紫よ。貴方をこの『幻想郷』に『連れてきてしまった』張本人。『境界の妖怪』とも呼ばれているわ。（訳：貴方も名乗りなさい。この世界の名前は幻想郷。あなたがこの世界に来てしまったのは事故でもあるのよ。）」

「境界の妖怪とは上手いこと言いますね。僕は山田太郎っていいます、ポジションはキャッチャー。もともとはあの少女を連れてくる

予定だったんですね。だったら僕は被害者なわけか。（訳：上半身だけが出ているのは空間の境界を操っているからか。名乗る気はない。事故ならとっとと元の世界に帰らせろ）」

「ドカベンさん、とでもお呼びしたらよいかしら？少女を助けようとするなんて立派でしたわよ。でも、この幻想郷の子供はどうでもいいのね。（訳：わたしは外に世界のことも英語も知っているわよ。この世界に来た原因はあなたにもある。人面樹との会話も聞いていたわよ。）」

「気軽に山田さんと呼んでください。八雲さんは外の子供はどうでもいいんですね。それにしても、あの人質を取った勘違いしているまぬけな妖怪は人面樹っていうのか。（訳：仲良くなれる関係じゃないだろ。おまえも人のこと言えない、お互い様だ。それにあんたならあの会話のホントの意味わかるだろ。子供を攫う気はない。）」

「そうねー、あれは最近調子に乗っているからもし子供を連れてこなかったら人里を襲っちゃうかもしれないわ。どうしましょう、困ったわー。この問題が解決できれば私に暇ができて、機嫌もよくなって、しなくてもいいことをしちゃいそう。（訳：人面樹退治するのを手伝ったら返してやる。）」

「なんで人面樹をそのままにしているのですか？（人里の抑止力はあんたじゃないのか？明らかにあんたのほうが格上なんだから一人で解決できるだろ。）」

「山田さん、私はこの幻想郷が大好きなの、住んでいる人間も含めてね。そして人間が生きていくためには食料が必要なの。私たち妖怪と違って。」

そういって八雲紫は受け取った林檎を口に運び一口かじる。

「もちろん人里の人間も最低限自給自足できるレベルには達しているわ。だけど、それだけでは厳しいのよ。…色々と。それは私の望む幻想郷ではないのよ。」

その言葉には確かにヒトへの思いが詰まっているのを感じた。

だからというわけではない。

ただ自分の世界に戻るために男は行動するだけだ。

「…それで僕は何をすればいいのですか？」

扇を広げ口元を隠しているのでまだ妖しく笑っているのかは分からないが、発した言葉には明らかにこちらの反応を楽しんでいるようだった。

「人里から子供を攫ってきてくれないかしら？」

黄昏時、現代では一番誘拐にあいやすい時間帯でもある。

表四回目（後書き）

やっと原作キャラと絡めることができました。

八雲紫が登場時にうたっている歌は椎名林檎さんの「りんごのうた」です。

裏四回目（前書き）

誤字修正しました。

裏四回目

Ｓｉｄｅ　八雲　紫

「人里から子供を攫ってきてくれないかしら？」

さて、この人間はどう反応するのかしら。

「つまり、手段ではなく理由が欲しいわけですね。」

……理解が早いのは助かるのだけど、つまらないわね。最初の作り笑顔からまったく表情が変わらないわね。

「そういうこと。人面樹自身の力は私には到底及ばないのだけれど、幻想郷の管理者としては何の理由もなく退治するわけにはいかないのよ。」

「そこで僕が人里の子供を攫ってきて理由をつくるんですね。」

「貴方は子供を攫う。人面樹はその子供を殺そうとする。私はその瞬間に人面樹を殺す。貴方は元の世界に帰れる。単純でいいじゃない。」

本当はこういうのは巫女がするべきことなのだけど。あの子は事件が起こった後にしか動かないでしょうし…。

「…それじゃあ、人面樹と人里について教えてもらえますか？」

「まずは人面樹について教えるわ、能力は《あらゆる植物を操る程度の能力》よ。」

「…能力？」

「そう、『程度の能力』。この幻想郷では少数ではあるけれど人、妖怪問わず能力をもっているモノもいるわ。人面樹もそう。」

「人面樹を退治しなかったのはその能力が惜しかったからですね。それで人里へ幻想郷じゃ育てにくい野菜や果物を提供していた。…本当に退治してもいいんですか？」

「このままじゃメリットよりデメリットのほうが大きいのよ。それに私の能力を使えば外の世界から持ってこれなくもないわ。めんどくさいけど。」

「さっきの人里への思いはどうしたんですか…。まぁ、どうでもいいですけど。そういえばこの森を支配しているのは人面樹でいいんですか？」

「あら、どうしてそう思うのかしら？」

「さんざん歩いて生き物の姿はおろか気配すら感じませんし、３０分『も』気絶していたのに何もされてなかったので。」

「３０分『しか』気絶していなかったのに、の間違いじゃないかし

ら？」

「僕がいた場所から３０分『しか』経っていないなにここ、幻想郷でしたっけ？にいる。しかし３０分『も』気絶していて命が危険にさらされているのに何もなかった。これが一応の根拠です。あと、憶測ですが人面樹は森に侵入されたとき、それは動いているモノしか感知できない。僕が起きるまで姿を現さなかった理由がこれです。ついでに音も感知できないじゃないですかね？それとも八雲さんの能力で遮断しているのかな？」

さりげなく私の能力の『範囲』ついてに探りを入れてくるあたり油断ならないわね。まぁ能力自体の見当はついてるんでしょうけど。

「私の能力は使っていないわよ。人面樹は根でしか感知できないの、そして森全体にその根を張り巡らしているわ。」

「…分かりました。人里について教えてください。」

「人里は電気も通ってないし、みんな着物を着ているわ。明治で時代は止まってると思ってくれていいわよ。」

「子供たちがたくさんいる場所はありますか？」

「上白沢慧音が寺子屋を開いているわね。」

「その上白沢さんってのはどんな人物なんですか？」

「少し頑固で石頭。授業はあんまりいい評価ではないけれど、里の

みんなから信頼されてるわ。なんだかんだいって子供たちにも好かれてるし。」

……無表情になったわね。何を考えているのかしら、ここまで感情が読めない人間も珍しいわ。

「……もう充分です。また三日後に会いましょう。」

「この世界、幻想郷について聞かなくていいのかしら？」

「どうせすぐに元の世界に戻るんです。常識が通じない世界。それが分かっていれば問題ないです。」

……興味がない、言ってくれるわね。その言葉後悔するかもしれないわよ。

彼と私が一口かじった林檎が目に入る。それをバスケットボールのようにくるくる回す。

「願わくばこの林檎が禁断の果実にならないことを祈るわ。アダムさん。」

「せいぜい誘惑に負けないようにしますよ。イヴさん。」

…ホント面白いわね、だけど…

「そうねぇ……貴方に足りないものは、表情かしら？仲良くなるための。」

「どうでしょうね。Ｂａｄ（ロクデナシ）Ａｐｐｌｅですから。」

そして、私はスキマに入り、彼と別れた。最後の言葉、聞こえたかは分からない。

幻想郷は全てを受け入れるのよ。それはそれは残酷な話ですわ。

裏四回目（後書き）

林檎の実の花言葉　誘惑　好物

表五回目

（……帰れるめどはついたが、めんどくさいことになってきたな。）

男の口から自然とため息が漏れる。周りはすっかり闇に包まれており、腕につけている時計の針は数字の八を指していた。

（…寝るか。今日はいろんなことがありすぎた。朝早く起きて出発すれば、昼ごろには人里に着くだろう。）

幻想郷は全てを受け入れる。

…か随分と意味深な言葉を残して行ったな。

一口だけ齧った林檎を放り投げ、男は目を瞑り寝転がる。

（…自分はどこか抜けているな。いくら似ていても違う世界の食べ物を簡単に口にしてしまうなんて。おそらく、何か体に影響が出る可能性があるんだろうな。）

境界の妖怪が自分をアダムと呼んだのはそういうことだろう。さらに気にかかるのが、

『程度の能力』

この言葉を聞いてから頭に何か引っかかっている。

忘れ物をしているような。

かゆい手ところに届かないような。

そんな感覚だ。

……正確には人面樹に襲われてからあった感覚がより強くなったと言ったほうが正しいな。

男はそんなことを思いながら眠りについた。

なぜなら、人面樹がこの森を支配していて、自分を襲わないとわかっているからである。

日の光が男の顔にあたり、しばらくして彼は目を覚ます。

（……6時、いい時間だな。出発するか。）

立ち上がり、一度大きく伸びをして歩き始める。

右手には梨を持ったまま。

（やっと森を抜けたか。…あれが人里か。）

約６時間ほど歩き続け、男は人面樹の森を抜けた。

その先には草原が広がっており、塀と門のようなものがが見える。

（…大体歩いて３０分くらいで着きそうだな。つまり３０分もあれば人面樹の森に子供を連れていけるわけか、ありがたいな。）

彼は自分の服装に少し気を遣って人里へ向かって歩き続けた。

そして、門と門番らしき人間が目に映る位置にくると必死に走り始めた。

「……た、助けてくれ！！ば、化け物に殺される！」

表五回目（後書き）

主人公に分かりやすいフラグがたちました。

誤字修正しました。

裏五回目（前書き）

誤字修正しました

裏五回目

Ｓｉｄｅ　門番

幻想郷の人里は塀に囲まれており、東西南北四つの門が設置されている。

北に続くは妖怪の山

西に行けば魔法の森

南の奥深くには迷いの竹林

東を尋ねれば博麗神社

人里の人間たちは危険区域の境界を理解しており、一般的にそれらの場所を越えようとする者は少ない。

そして人里は妖怪の賢者に保護されているので危険が迫ることはまずない。

ゆえに配備されている門番たちもあまり気を張って警備しておらず、ゆっくりとした時を過ごしていた。

「……今日も人里は平和だなぁ。午の刻（１２時）を知らせる鐘も鳴ったし昼飯の時間にするか。」

南の門番をしている男は風呂敷から最愛の妻が作ってくれた弁当を取り出す。

「そういえば、明後日は俺の誕生日か…娘二人が何かこそこそと話し合っていたな。」

おそらく、自分を祝う準備をしているのだろうと思うと自然と笑みがこぼれる。

「ふふっ、しかし驚くのは娘たちだろうな。何せその日弟か妹ができることを知るのだからな。」

妻と話して決めていたことだ。

「今頃、二人とも寺子屋で上白沢先生にしごかれているだろう。…昔の俺がそうだったように。」

箸を進めながら子供時代を思い出す。

「今となってはいい思い出だが、先生の頭突きは本当に痛かった…。」

竹の水筒にいれている水を飲み、弁当の残りも平らげる。

「…うし、それじゃあ午後の仕事も頑張りますか。今日も人面樹の森の立ち入り許可日じゃなかったな。だったら人の出入りは少ないな。」

人里には2週間に一度、ここから見える人面樹の森に立ち入ることができる日がある。もちろん、行く人、人数は決めておりそれを監視するのも門番の仕事でもある。

「前に一度だけ食べた、まんごーっていう果物はおいしかった。機会があればまた食べたいが難しいだろうな。」

俺は肩を落とし再び、門に戻った。

すると、そこに見知らぬ男が必至の形相で走ってきた。

「……た、助けてくれ！！ば、化け物に殺される！」

（人里の人間じゃない！？）

「だ、誰だ貴様は、人に化けた妖怪か！？」

そう言って、手に持っていたやりを突き付ける。

すると男は腰を抜かしたのか後ろに尻もちをつき必死に弁解する。

「違う！！俺は化け物から逃げてきたんだ。」

よく見ると男はあまり見ない格好をしているが、所々汗の跡や泥が付いており、転んだのか膝も擦りむいているようだった。

「…あんた、まさか外来人か？その格好、妖怪のことも知らないみたいだし。」

「外来人？妖怪？なんだよそれ。ってかここはどこだよ！？いったい何が起きたって言うんだよ！」

男はあたりを挙動不審に見回し、怯えているようだった。

「…疑ってしまってすまない。もう大丈夫だから落ち着くんだ。」

（生きている外来人は初めて見たな。）

「…そ、そうだ上白沢慧音ってやつがここにいるんだろ！？会わせてくれ。」

「先生に、何故？」

「妖怪の賢者ってやつに言われたんだ。そいつが俺を元の世界に戻してくれるのを手伝ってくれるって。」

……妖怪の賢者。会ったことはないがこの里を保護している妖怪か。

「分かった。彼女は寺子屋にいるから、ひとまずそこに行こう。ちょうど昼飯の時間で授業も行っていないだろうし。」

「あ、ありがとう。ほんと俺、何が何だかわからなくて、どうしようもなくて…」

混乱するなというほうが無理だと俺は思う。

「何、気にするな。困った時はお互い様だ。」

こうして俺はこの名前も知らぬ男を寺子屋に連れていくことになった。

後になって思い返してみてもこの判断が正しかったのかは分からない。

表六回目

Ｓｉｄｅ　上白沢　慧音

寺子屋には人里の子供たちが多く集まっていた。

子供たちにはそれぞれ一つずつ机が与えられており、みんな畳の上で正座したり胡坐を組んだりして授業を聞いている。

「……であるから、太郎君が結果的に食べた蜜柑の個数は３と６分の１個となるわけだ。」

私は片手に教科書とチョークを持ち黒板を使って算数の授業を進める。

カーン　カーン　カーン

「む、もうこんな時刻か、それじゃみんなお昼ご飯にしようか。」

すると今までつまらなそうに私の授業を聞いていた子供たちは一瞬で元気を取り戻し騒ぎ始めた。

「やっと終わったー。」

「今の問題分かった？」

「ええと、今のはね…」

「あ、国語の教科書忘れちった。」

「一緒にご飯食べようぜ。」

まったく現金な奴らだな。

「午後からは国語の勉強するからなー。教科書忘れた奴は家に取りに帰れよー。あと、分からない問題があるなら先生に直接聞いてもいいんだぞー。」

「先生に質問に行くこんな問題も分からないのかって、頭突きされるから嫌。」

「頭突きした方が忘れないだろ？」

お昼の時間は大体二つのグループに分かれる。

一度家に帰って家族と一緒にご飯を食べる組。

弁当を作ってきてもらって友達と一緒にご飯を食べる組。

「…さて、私も食べようかな。」

教卓の上を片づけ用意していた弁当箱をその上に置く。

「けーね先生、一緒にご飯たべよ！」

「……たべよ？」

二人の少女、正確には姉妹がそばに寄ってきた。

この寺子屋の生徒、美希と真希だ。

「もちろんそれは構わないが…。珍しいな、おまえたち二人はいつも家に帰ってご飯を食べていたはずだが？」

「今日は特別！実は先生に相談したいことがあるの！」

「…あるの。」

元気がいいのが姉の美希、いつも姉の後ろにいるのが妹の真希だ。

「相談？なんだ？…」

「明後日がお父さんの誕生日なの！」

「…誕生日なの。」

ふふっ、二人ともまるで自分の誕生日のように喜んでいるな。

「ほほぅ、それはめでたいな。何を贈るんだ？」

「何贈ればいいか分かんなかったからお母さんに相談した！」

「……相談した。」

「「そしたら」」

なにやら、がっかりしているが…

「…なんて言われたんだ？」

「貴方達がいっぱいいっぱい考えて、たくさんたくさん気持ちが籠っていればお父さんなんでも喜ぶわよって言われた！」

「…言われた。」

…なるほどな。

「お母さんの言うとおりだな。」

「でね、私たちいっぱいいっぱい考えた！」

「…考えた。」

「ふむ、それで？」

「「…だから、たくさんたくさん気持ちが籠ったお手紙書くことにした！」」

「相談したのはけーね先生にお手紙書くの手伝って欲しいからなの！」

「…手伝って欲しい。」

「そういうことなら大歓迎だ。さっそく今日の授業が終わった後手伝おう。幸いにして手紙を書く道具はたくさんあるからな。」

「ホント！？ありがとう！！けーね先生。」

「……ありがとう。」

子供というのは本当に素直でかわいいな。私も欲しくなってしまうな。

……まぁそんな相手はいないが。

「…よし、相談も終わったことだしご飯を食べるか！」

「「うん！」」

「それじゃ、手を合わせて…」

「「「いただきます。」」」

そして、私たちが弁当に手をつけようとした時、寺子屋の戸が勢い良く開いた。

「先生！上白沢先生はいますか！？」

戸をあけたのは先ほど話題にでてきた父親だった。

「なんだ騒々しい。また昔みたいに頭突きを喰らいたいのか？」

「そ、それはご勘弁を…。実は先生に会わせたい人がいまして。」

「会わせたい人？それは急を用するのか？見ての通り私とお前の娘たちは今食事中なんだが…」

「美希！真希！ちゃんと勉強しているか？って今はそれどころじゃない。おい、あんた入ってきてくれ。」

すると父親の後ろから見知らぬ男が現れた。

「この方があんたが会いたがっていた上白沢慧音先生だ。」

父親が勝手に紹介を始める。私はいまいち状況が呑み込めていないのだが…

男は突然私に近づき両肩を掴み、思いっきり前後に振り始めた。

「おまえが上白沢か！早く俺を元の世界に戻してくれ！！」

「ちょ、待て、なんのことだか、わけ、が分からんぞ。」

「なんでもいいから、早く！」

男はそれでも私の肩を振り続けた。

……イラッ

私は両腕で男の頭を固定し…

「いい加減に…しろ！！」

ガゴッ！

頭突きをした。

表六回目（後書き）

明治初期に黒板は全国に広がったそうで…この小説では普通に使っていることにしました。

裏六回目

門番に連れられて寺子屋に到着した。

「あんたはそこで待っててくれ、いるとは思うが一応先生がいるか確認してくるから。」

そう言って彼は中に入っていく。

待っている間に町の様子を観察してみる。

八雲紫が言っていた通りほとんどの人が着物を着ているがそれ以外は普通だな。中には少し変わっている格好をしている者もいるが…。

（……あきらかに人間じゃないモノも歩いているな。）

おそらく、妖怪であろう。数は少ないが人間と話しているモノもいる。

（この幻想郷なら昔話に出てくるいろんな妖怪のいそうだな。）

男はこの幻想郷について少し考えを巡らせる。

八雲紫には暗に幻想郷に興味はないと言ったが、実はそんなことはない。

情報は多いに越したことはないのだから。

ただ、少し知る必要があったのだ。彼女が自分を裏切らないかを…。

結果、興味がないという反応をすると彼女はほんのわずかだが苛立ちを見せたのだ。

（ああいう性格をしているものが自分に気づかれるぐらい感情を表したんだ。）

彼女自身も言っていたがよっぽどこの幻想郷を大切にしているのだろう。

そのことを確認できただけで良しとした。

彼女は自分を裏切らない、男はそう判断した。

そんなことを考えていると寺小屋の中から声が聞こえた。

「……って今はそれどころじゃない。おい、あんた入ってきてくれ。」

呼ばれたので寺子屋の中に入るとそこにはたくさんの子供たちがご飯を食べていた。

その子供たちの訝しんでいる視線を受けながら男は門番と大人の女性、子供が二人いるところまで歩いていく。

「この方があんたが会いたがっていた上白沢慧音先生だ。」

門番から紹介された女性は、変わった帽子を被っており、薄い青みがかかった髪はストレートで、腰に届くかというところまで伸びている。顔は整っており質問すればほとんどの男女が美人と答えるだ

ろう。

「おまえが上白沢か！早く俺を元の世界に戻してくれ！！」

かなり切羽詰まっている様子で相手の肩を掴み揺さぶる。

「ちょ、待て、なんのことだか、わけ、が分からんぞ。」

（あぁ、門番はまだ何も説明してなかったのか。）

「なんでもいいから、早く！」

（それでも貴方の性格を少しでも知りたいのでやめません。）

揺さぶるのをやめないので彼女は男の顔を固定し…

「いい加減に…しろ！！」

ガコッ！

頭突きを喰らわした。

（っ痛うぅ…。なるほど、なかなか気の強い女性だことで…。あと思っていたより石頭だったな。）

「どうだ、少しは落ち着いたか？」

彼女の発した声はとてもやさしく、力強かった。
頭を固定したままこっちの瞳をしっかりと見つめ尋ねてくる。
（…多分だがいい先生なんだろうな。子供に好かれ、信頼されているわけだ。）
「…んん！！大変失礼いたしました。私は通武（つぶて）手と申します。貴方が上白沢慧音さんでよろしいでしょうか？」
慧音は男の豹変ぶりに呆れつつ会話を続ける。
「いまさら取り繕っても遅いと思うが…まぁいい。私が上白沢慧音だがいったい何の用だ？通武手、おまえの恰好を見たところ随分焦ってここまで来たようだが…。変わった格好もしているし、何者だ？」
（そりゃこの格好はそう見えるようにわざと汚したものだし。）
すると、今まで事態を見守っていた門番が、
「それが先生、彼はどうも『外来人』みたいで…。」
（『外来人』、外の世界から来た人間のことなんだろうな。）
「なんだと！？しかし生きているぞ。何故だ？」
（門番も驚いていたが、どうやら境界の妖怪は外の世界で死ぬのが確実な人間を連れてきているらしいな。連れてくる理由までは…推

測の域をでないが、おそらくそういうことなのだろう。）

「おそらく人面樹の森を抜けてきたんでしょうけど。詳しいことは彼に聞いてみないと。…がそろそろ私は門に戻らないといけません。あとは頼みましたよ先生。」

「いきなり連れてきて、いきなり帰るとは…理由が仕事ではなかったら頭突きをしているところだ。」

「…はは。それじゃあな、美希に真希。いい子にしてるんだぞ。」

「バイバイ『お父さん』。お仕事がんばってね」

「…がんばって。」

「門番さん、ありがとうございます。」

「お前さんが元の世界に戻れることを祈ってるよ。何か困ったことがあったら家に来い、少しは世話してやる。あと俺の名前は門番さんじゃなくて真悟（しんご）だ。覚えておけ。」

そういって真悟は寺子屋から出ていった。

「やれやれ、『昔はいつも授業中にイタズラする』悪ガキだったのに、いつの間にか大人になって…。」

慧音は一つ溜息をつく。

「おっと感傷に浸っている場合じゃないな、話を聞かせてもらえる

か？」

男はやっと自分の話を聞いてくれるようになったのが嬉しかったのか話しだす。

「……説明いたしましょう。私は車に轢かれ気を失いました。気がつくと見知らぬ森にいました。右も左もわからずその森をさまよっているといきなり、しゃべる木が私の目の前に現れたのです！！しかもそいつは私を殺そうとしてきたのです。私は怖くて怖くて必死に逃げました。……だけど転んでしまい木の化け物に捕まってしまったのです。絶体絶命の私！もはやこれまでかと思われたその時！！」

ずいぶんと劇チックに男が語る。

「その時？」

突然、恍惚とした表情になり、話を続ける。

「美しい女性がどこからともなく姿を現したのです。彼女は木の化け物と何か話しているようでした。するとどうでしょう？話が終わると木の化け物は森の中に消えて行きました。そう彼女が私を助けてくれたのです！！」

まだまだ続ける。

「そして彼女は私に言ったのです。『私は妖怪の賢者。この森を抜けるには実がなっていない木に沿って進みなさい。森を出たら人里が見えます。そこに上白沢慧音という人物がいるから彼女を頼りなさい。きっと貴方を助けてくれるでしょう』と。私は女神の言葉に

従い森を抜けることができました。森を抜け少し気分が高揚した状態で門番さんに会ってしまったのです。そしてそのままこの寺子屋に…。勘違いしないでほしいのは本当の私はあんな人間ではないのです！！」

一気にしゃべり終わり男が軽く息を切らしていると…慧音がものすごくやさしい目で彼を見つめ…

「そうかそうか、怖かったな。つらかったな。いくら大人でもいきなりそんなことが起きれば戸惑うよな…。」

「ちがっ！私は！！…っ！」

男をやさしく抱きしめ、頭を撫でる。

「…大丈夫。無理しなくていいんだ。ちゃんと私がおまえを元の世界に帰してやるからな。」

慧音が初対面の男にこのような行動をしたのには理由がある。

「おまえはまるでちいさな子供だ、必死に強がって…、自分が弱いのを認めたくなくて…、だけど頼れる相手もいなくて…。」

…それは人間が好きなこと。もともと人間だった彼女にとってこれは当たり前のことだ。

「私は…。…俺は…。ボクは…。」

特に子供が好きな彼女にとって、頼られるのは大歓迎なのだ。

それなのに目の前には自分を頼ろうとしない子供のような大人がいる。

八雲紫を女神とすることで信じられるものを作り、自我を保とうとする大人。

慧音から見たらそれはとてもとても脆く、今にも泣き出しそうな子供だった。

「貴方を…信じてもいいんですか？」

だから、自然と手を差し伸べてしまう。

「ああ、もちろん！」

今にも泣き出しそうな男の顔を見つめ、笑顔で返す。

男も笑顔になり慧音を見つめ返す。

「…だが、2日ほど用事があるから待ってくれないか？もちろん泊る場所は用意するし、人里は安全だから妖怪に襲われることもない。」

その言葉を聞き、再び泣きそうになる男。

「よ、用事って…？」

「それは私たちよ、泣き虫なお兄さん！！」

今まであまり話の内容がよく分からなくて黙っていた少女達だった

が、自身に関係のある話になったのでしゃべりだす。

「明後日が彼女たちの父親の誕生日なんだ。その誕生日の贈り物に手紙を送ることにしていて、私はそれを手伝うことになっているんだ。」

「そうなのよ！だからお兄さんのお願いは後！」

「…後なの。」

男は一瞬無表情になった。しかし、その場にいたものは誰も気づかず、男は笑顔を浮かべる。

「……分かったよ。僕も君たちのお父さんにはお世話になったし何か手伝えることがあるか探してみるよ。」

（……準備を終えるまでもう少しだ。）

裏六回目（後書き）

通武手…センスのなさにむしろ爆笑。
もちろん偽名です。

表七回目

Ｓｉｄｅ　真希

お父さんが知らない男の人を連れてきた。

その人はなんだか難しい話をけーね先生としている。

「それは私たちよ、泣き虫なお兄さん！！」

お姉ちゃんが話に割り込んだ。

「明後日が彼女たちの父親の誕生日なんだ。その誕生日の贈り物に手紙を送ることにしていて、私はそれを手伝うことになっているんだ。」

「そうなのよ！だからお兄さんのお願いは後！」

「…後なの。」

だから、知らない人としゃべるのは怖いけど私もお姉ちゃんの後に続く。

私はいつもお姉ちゃんの後ろ。そこが一番安心するから。

「……分かったよ。僕も君たちのお父さんにはお世話になったし何か手伝えることがあるか探してみるよ。」

男の人は私たちの方を見て、やさしく微笑む。よかった、なんだかいい人そう。

「さて、それじゃあ話もまとまったことだし食事を済ませてしまおう。早くしないと昼休みが終わってしまう。」

けーね先生が私たちに言う。

「通武手、おまえはどうする？なんだったら私の弁当を分けてやるが？」

すると、つぶてさんは横に首を振った。

「遠慮するな。幻想郷に来てから何も食べてないのだろ？」

「確かにそうなんですけど、今は食欲よりも眠気の方が強くて…。」

つぶてさんは申し訳なさそうしている。

「む、そうか。だったらあそこの部屋で休むがよい。あの部屋は私がちょっとした作業をするのに使っている部屋でな。授業に使ういろいろな資料や道具、簡単な寝具が置いてあるから、使ってくれて構わないぞ。」

けーね先生はこの部屋の右奥にある戸を指さす。

「ありがとうございます。そうさせてもらいます。」

そういって彼は部屋の中に入って行った。けーね先生は少し心配そうに彼を見ている。

…むぅ。

「けーね先生、はやくご飯たべよ！」

「……たべよ。」

お姉ちゃんが私の気持ちを代弁してくれる。

「おお、そうだったな。急いで食べないと。それじゃ改めて、いただきます。」

「「いただきます！」」

こうして私たちはやっとお弁当を食べ始めた。

Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

Ｓｉｄｅ　美希

お父さんの誕生はもう明日！！

昨日はあれから急いでおべんとーを食べて、午後の授業もちゃんと受けたわ、…ちょっと寝ちゃったけど。

そして待ちに待った放課後！

けーね先生にお父さんへのお手紙の書き方を教えてもらったわ！

「…まだ完成してないけど、明日は寺子屋はお休み。必ず今日中に書き終えてみせるわ！」

「……あー美希？気合いを入れるのはいいことだが、それは放課後まで取っておこうな？」

「……あ。」

「…お姉ちゃん。」

どうやら昨日のことを思い返しているうちに私は声を出してしまっていたらしい。

まだ授業中なのに…。

まわりの友達がクスクスと笑いだす。

……は、恥ずかしぃ。

そんなことは少しも気に留めずけーね先生は授業を再開した。

カーン、カーン、カーン

私がそうやく悶えるのをやめた頃、定時をしらせる鐘の音が響いた。

「よし、今日の授業はここまで。各自帰る用意ができたら帰ってよし。」

先生がその言葉を言い終わらないうちにみんな帰る支度を始める。

「宿題はさっき黒板に書いたところだからな。忘れるなよ。もし、忘れたら頭突きだ。」

帰る準備ができた子供たちに注意を促している先生。

私と真希はせっせと手紙を書くための準備をする。

けーね先生はみんなが何か忘れ物をしていないか教室を見回っている。

「…どうやら忘れ物はないらしいな。美希、真希、準備はできてる

か？」

「うん！大丈夫だよ！！」

「……大丈夫。」

「それじゃ、昨日の続きから行くか。」

けーね先生が私たちの机の前に座る。

……あれ？そういえば…

「けーね先生、あの男の人、つぶてはどうしたの？」

昨日、あの部屋に入ってから一度も姿を見てないわ。

「大人を呼び捨てにするのは感心しないな。」

「…いいのよ、あんななさけない顔するのは大人とは呼ばないわ。」

「やれやれ、彼のつらさはまだおまえたちには分からんか…。私が昨日お前たちの手伝いをし終わった後、様子を見に行ったら熟睡していたから、おにぎりと今日はここに泊っていいという旨を書いた手紙をおいて、私は家に帰ったぞ。」

（本当は起きていて、もとの世界に帰る方法について教えたら、少し一人になって考えたいとお願いされたからなんだが。わざわざ言う必要はないだろう。）

「それでいつも通り朝、寺子屋に行ったら『人里を見て回ってきます、夜には戻りますと』いう手紙が置いてあった。」

けーね先生はなんだかすごく不満で不安そうな顔をしている。

（私を信じると言ったのに…もっと頼ればいいのに…。…心配してしまうじゃないか。）

その表情を見て私はなんだかけーね先生がアイツに取られちゃった気がして…

「あんな情けない奴、人里を出てきっと今頃妖怪に食べられちゃてるわよ。けーね先生！そんなことより早く手紙の書き方教えて？」

ガゴッ

そんなことを言った瞬間頭突きされた。

「言って良いことと悪いことがある。授業でも教えたよな？」

先生の笑顔が怖い…。

「ご、ごめんなさい…。」

「分かればよろしい。……それじゃ手紙を書こうか！」

そういって急に張り切りだしたけーね先生。なんでなんだろ？

まっ、いっか。お父さんへの手紙を今日中に書かないといけないし、私も頑張らなくちゃ。

私たちは手紙を書き出した。

……ここはこう書いて

……あ、字を間違えちゃった

……。

……よし。

「できたー！！」

「……できた。」

私が書き終わると同時に真希も書き終わったらしい。

「二人ともよく頑張ったな。」

そういって先生が私たち二人の頭を撫でてくれる。

「お父さん、喜んでくれるかな？」

少し不安になって尋ねてしまう。

「もちろんだとも、私が保障しよう。」

「…そっか、えへへへ。」

「…えへへ。」

私も真希も嬉しくなってつい笑ってしまう。

「二人とも嬉しいのは分かるが、もうこんな時間だ。遅くなりすぎるとご両親が心配する。片づけは私がやっておくから早く帰りなさい。」

外を見てみるとあたりはすっかり暗くなっていた。

「うん、分かった！けーね先生、手伝ってくれて本当にありがとうございました！！」

「…ありがとうございました。」

「なに、また困ったことがあったら遠慮なく言ってこい。手伝える範囲で手伝ってやる。」

「大好きだよ！先生！」

「…私も大好き。」

すると、けーね先生は少し照れくさかったのか顔を背けつつ手を振ってくれた。

「…私もだよ。気をつけてな。」

「ばいばい、先生！」

「…ばいばい。」

懐に大事な手紙をしまって、私たちは寺子屋を出た。

「お父さんには絶対に見つかっちゃだめだよ！真希！」

「…お姉ちゃんも。」

…トンッ

そんな会話を暗い道中していたせいで人にぶつかってしまった。

「あ、ごめんなさい。」

「…いや構わないよ。こっちも考え事をしていたしお互い様だ。」

ぶつかった相手は情けない男、つぶてだった。

表七回目（後書き）

幼女逃げて、超逃げて

裏七回目

日はまだ昇っておらず、人里には朝霧がかかっていた。
故に出歩く人影は少なく、里は静けさを保っている。
そんな中、男は南門の壁に寄りかかり、昨夜の慧音との会話を思い返していた。

「…博麗神社？」

「そう『博麗神社』。ここから東にある神社だ。外の世界と幻想郷の境目に存在していて、『博麗大結界』を管理している『巫女』がいる。彼女に頼めばおそらくお前を外の世界に帰してくれるだろう。」

「そこに行くには、どれくらいの時間が掛かるんですか？」

「普通に歩いていけば2日だな。急げばもう少し早くつくだろうが…。」

「2日ですか。…その巫女ってどんな人なんですか？」

「現巫女は博麗霊夢という名前だ。私も直接は会ったことはないが、話に聞く限りでは『裏表のない性格』だそうだ。」

「……すみません。少し考えたい事があるので一人にしてくれませんか？」

男は申し訳なさそうに慧音にお願いする。

「それは構わないが、あまり考えすぎるなよ。明日、美希と真希の手伝いが終わって、その次の日に私がおまえを博麗神社に連れて行ってやるから。きっとすぐに外の世界に帰れるさ。」

「ありがとうございます。今日はここに泊っても大丈夫なんですか？」

「部屋を荒さなければな。…もし散らかしたら、分かるだろ？」

慧音は自身の額を指さして笑う。

「…来た時よりも美しくしときます。」

「いい心がけだ。…それじゃあ私は家に帰るからな。私の家は寺子屋のすぐ裏だ。何かあったら遠慮なく訪ねて来い。……っとそうだ、食欲があるならこれを食え。」

彼女は何か葉でつつまれたものを男に渡そうとする。

「……これは？」

明らかに手のひらサイズはあろうかいう丸い物体に少々戸惑う男。

「おにぎりだ！少々不格好だがなかなかおいしいと自負している。」

彼は少し驚いた様子だったが片膝をつき、それを仰々しく受け取った。

「…有り難く頂戴致します。こんな美人の手料理が食べられるなんて、この世界も捨てたものじゃないですね。」

彼の言葉に少々呆れた慧音だったが同時に安心もしたようだった。

「…軽口を叩く元気がでてきたならもう大丈夫だな、おやすみ」

そう言って慧音は寺子屋から出ていった。

「ええ、おやすみなさい。」

彼女が出ていくのを確認すると男は葉に包まれたおにぎりには手をつけずに『仕舞った』。

（これで選択肢が増えたわけだが…）

１つはこのまま八雲紫の提案に乗り、子供を人里から攫う。

２つ目は一人で博麗神社まで行き、元の世界に戻してもらうように頼む。

最後は上白沢と一緒に博麗神社まで行き、彼女に事の成り行きをまかせる。

どの選択肢にもメリット、デメリットが存在しているな…。

最初の選択肢、メリットはもちろん、成功すれば確実に元の世界に帰ることができる。デメリットは子供を攫うという危険を冒さなければならないということ。

二つ目の選択肢、メリットは子供を攫わなくていいということ。しかし、デメリットが大きい。まず、一人で博麗神社に着くことができるかどうか。そして、仮に着くことができたとしても元の世界に帰れる保証は無い。日数の関係上、八雲紫にはバレずに神社に着くことができるが…。

最後の選択肢、子供を攫わなくていいし、おそらく上白沢についていけば安全に博麗神社に着けるだろうし、元の世界へ帰れるように協力してくれるだろう。だがデメリットの方が問題だ、この選択肢は八雲紫に確実にバレてしまう。…がそれは大したデメリットじゃない、一番の問題は……

男がそんなことを考えていると門の方が騒がしくなってきた。

「夜勤お疲れ様、交代の時間だ。」

「ふ～やっとか、久しぶりに入ったが眠くてたまらん。」

「ははは、そう言うな。みんな経験してることだ。」

どうやら門番が交代の時刻になったらしい。

男は身に着けている腕時計を見る。

（午前８時ちょい過ぎ…８時が交代の時間とみていいな。…知りたい事も知ることができたし人里を見て回るか。）

そして彼は門番に気づかれないように立ち去った。

（日も完全に昇って、人里にも活気が出てきたな。）

男が里を回り始めて、５時間が経とうとしていた。

その成果は、おおよその幻想郷の地形…

魔法の森、妖怪の山、迷いの竹林、太陽の畑、そして香霖堂

これらの場所とそれらを人里の人間がどのように認識しているか、

だった。

（帰るのに役に立ちそうな情報はなかったな。）

（……。）

彼は疲れたのかどこか休める場所を探して、人通りの少ない道を進んでいく。

角を曲がり、完全に人気（ひとけ）『は』ない場所で立ち止まり、振り返る。

「確か、約束のデートは明日のはずでしたが？」

裏七回目（後書き）

慧音が霊夢と会っていないのはまだ永夜抄が起きてないからです。

表八回目

Ｓｉｄｅ　八雲　紫

「確か、約束のデートは明日のはずでしたが？（訳：なんの用だよ）」

「つれないわねぇ～。そんな部活のＯＢ、しかも3個上の人が現れたような表情をしなくてもいいじゃない。」

「用があるから現れたんですよね？（訳：さっさと用をすませろ）」

せっかちな人ね。まぁわざとなんでしょうけど。

「貴方にいくつか注意しておこうと思って。」

「博麗神社のことですか？（訳：あの先生に関わらせた時点気付いてただろ？別の帰る方法を提示してあんたどうしたいんだ？）」

「それは別にいいわ。（別にどうもしないわ。貴方は博麗神社には行く選択はしないもの。）」

…私のこの言葉にどう反応してくれるのかしら？

「……何故ですか？（訳：どうして、その選択はしないと？）」

ふふ、少しはいい表情するじゃない、そっちの方が素敵よ。

……本当は貴方の考えることが読めなかったけど、今の発言で博麗神社に行かない確信が持てたわ。

ついでに…いやこっち方が本命かしら？

見えたわよ、貴方の人間性がね♪

「それはね。貴方が良くも悪くも利己的で、普通、人が持っている人間味を持っていないって、『さっき』分かったからよ。」

「……あぁ、なるほど。あの言葉はカマをかけたわけですか。それじゃ、参考までにそのワケを教えてくれますか？」

そう言って彼は目をつむり私の話に耳を傾ける。

「そうねぇ、まず一人で博麗神社に行く選択肢はないわ。」

「どうしてですか？」

「貴方が一番優先しているのは外の世界に帰れること、その次にある程度の安全。だから、両方不確定なこの選択肢は一番に除外されるわ。」

「…確かに僕は一番初めにその選択肢を除外しました。」

「次に上白沢慧音と一緒に博麗神社に行くという選択肢ね。」

「これには安全性もあって、元も世界に帰れる確率も高いですよ？」

「そうかしら。その選択は2つの不安要素を持っているわよ。」

「一つは私との約束を破ってしまうこと。まぁ、貴方はこの選択をする場合気にしないでしょうけど。なぜなら…」

彼が私の会話に割り込む。

「もう一つの不安要素、それによって八雲さんの目的は達成されますからね。…ホントいい性格してますよ。」

私の目的、『理由』を作ること。そして…

「もう一つの不安要素、それは…。」

「「人面樹」」

彼と私の口から同じ音が発せられる。

「もし、僕が約束の日なっても子供を連れてこなかったら、まず間違いなくあの妖怪は人里を襲いにくるでしょうね。直接会話をしてそう感じましたね。」

億劫そうに彼は説明を続ける。

「八雲さんにとっては『理由』ができるから、問題はないんでしょうけど…。」

「貴方にとっては問題しかないわね。人里が襲われたら、貴方自身に危険が及ぶし、上白沢慧音は貴方を博霊神社連れていくどころじゃなくなるもの。さらにあの妖怪が貴方との取引を里の人間にばらす可能性も高いね。」

「そうなったら僕は人里を追い出されるでしょうね。博霊神社にも一人で行くことになる。…いや下手したら妖怪に突き出されるかも知れないな。」

はぁー、と一つため息をついて彼は肩をすくめる。

「どうやら、八雲さんは僕が思っていたより賢く、自分が思っていたより僕自身は馬鹿らしい。…だから貴方は博霊神社の情報について、特に知られないようにする必要はなかったんですね。」

妖怪の賢者という二つ名に恥じないですね、と男は付け加える。

「それで、どうして人間味が無いなんて言うんですか？そんなこと言うと泣いちゃいますよ？」

…目に涙を浮かべて今にも泣きだしそうだわ。彼のことをよく知らないならまず騙されるわね。

「私は今まで幾人もの人間を外の世界から連れてきたわ。その中でこの幻想郷の人里に己の知恵、行動、判断で生きたまま辿り着くことができたのはこの数百年で貴方だけよ。（訳：普通の人間は妖怪

に出会って何もできずに殺されてるわ。）」

「ただ死ぬのが怖くて必死になってただけですよ。（訳：それは生物として当たり前のことで運が良かっただけ。）」

「…それだけじゃないわ。安全な人里に着いて、別の帰れる方法があるのに、それに飛びつかず冷静にそのメリット、デメリットを考えて行動したわね。（訳：命の安全が分かれば気を抜くのが普通の生物よ。そして深く考えず安易な選択をしてしまうのが平凡な人間。）」

私はまだ話を続ける。

「さらに言えば、子供を攫わないという選択肢も一見するとあったのにそれを選択せず、攫うことになんの戸惑いも躊躇いもない。これで人間味があるというほうが可笑しいわ。」

あら、また無表情になったわ。…その表情がさまになっているのはそうやって外の世界で生きてきたからかしら？

「一言、負け犬の遠吠えをさせてもらうならば……貴方ほど胡散臭い女性には会ったことはない。（確かに人間味はないみたいだが、あんたも人のこと言えないだろ。）」

「ひどいわ、私ほど素直な女性はいないというのに…およよ。」

袖を使って涙を拭う振りをする。

「で、だいぶ話が逸れましたが八雲さんが最初に言っていた注意しておくことって何ですか？」

「貴方が人間味のないヒトって分かったから、ほとんど意味はなくなったけど一応しておくわ。」

「つまり、人面樹が子供たちに何をしても殺そうとする以外、八雲さんは何もしない。だから、僕自身が殺されようとしている、若しくは何か酷いことをされている少女たちを助けたいのなら、自力でなんとかしろってことですね。」

……。

「…前もそうだったけれど、理解が早いわね。とても助かるのだけど…何かしら、若干いらっとするわね。」

「言いたいことは言わないと、イライラするのはお肌に悪いですよ。まぁ同じことを二度も聞く気は僕にはないですけど。」

「あら、じゃあ最後に一つだけ聞かせてもらうわ。」

「好きな女性のタイプは胡散臭くない人ですよ？」

「……私が話しかける前に『どうやって』私の存在に気付いたの？」

すると彼は少し考える様子を見せ、右手の人差し指を顎に置き答えた。

「ひ・み・つ♪」

……お肌が悪くなりそうだわ。

裏八回目

八雲紫にちょっとした仕返しをしてから、かなりの時間が経過した。

人里はすっかり闇に包まれ、人気『も』なくなった。

そんな中、男は寺子屋の少し離れたところから少女たちが出てくるのを待っている。

（…確か明日が父親の誕生日で、そのために手紙を書いてるんだったな。）

もう暫くして、嬉しそうな顔をした美希と真希が寺子屋から出てきた。

二人は何かしゃべりながら家に帰っていく。男がいることには気づいていないようだった。

目的の二人の様子を見て彼は予定していた行動を始めた。

…トンッ

「あ、ごめんなさい。」

美希がぶつかった相手に申し訳なさそうに謝る。

「…いや構わないよ。こっちも考え事をしていたしお互い様だ。」

美希と男の目が合う。すると、美希はぶつかった相手が誰か分かり態度を一変させる。

「なんだあんただったの、謝って損したわ。」

彼女のそんな態度に別段気を悪くした様子もなく男は質問する。

「こんな時間まで寺子屋にいたのか。お父さんへの手紙は書き終わったのかい？」

姉は胸を張り答える。

「あったりまえよ！！」

妹は小さく頷く。

「……書けたよ。」

それを聞いて男は優しく微笑んだ後、少し困った様子を見せる。

「それは良かった。…僕も世話になった君たちのお父さんに何か送りたいんだが、あいにくこんなものしか持っていないんだ。」

そう言って彼はいつのまにか手に持っていた梨を彼女らに見せた。

「…これ！？赤くない林檎じゃない！！何処でこんな貴重なもの持ってるのよ！」

「……赤くない林檎だ。」

少女たちはかなり驚いている。

「これはそんなに珍しいものなのかい？人里に来る途中の森で手に入れたんだが。」

「あんた、人面樹の森を通って来たの？よく生きてここまで来れたわね。」

「…人面樹の森、危ないよ。」

「…その森で一晩過ごしたけど危険なことはなかったよ？」

彼はなんでもないことのように答え、その言葉を聞いて美希は何か考え込んでいる。

「…ねぇ、あんた、まんごーって果物知ってる？」

「マンゴーね。それも人面樹の森？だっけ、そこで見かけたよ。それがどうかしたのかい？」

「お父さん、それを食べたがってた。でも、なかなか手に入らないから残念そうだった。」

「それはいいことを聞いた！さっそく明日の朝、それを取ってきて君のお父さんに贈ろう。きっと喜んでくれるはずだ。」

男は満面の笑みを浮かべ、美希に情報を教えてくれた礼を述べる。

「さすがに贈り物が手紙『だけ』だったら、物足りなかっただろうしね。教えてくれてありがとう。」

「な！？そんなことないわよ！お父さんは手紙でも喜んでくれるもん！！」

「…喜んでくれる！」

彼女たちは反論する。

「確かに手紙『も』喜んでくれると思うよ？…だけどマンゴーを贈れば『もっと』喜んでくれるだろうね。」

男は『もっと』の部分を強調して言った。

「それは…そうだろうけど…。」、

「君たちも、一緒に来るかい？」

やさしく、甘く、落ち着きのある声で囁く。

「…人面樹の森には勝手に行っちゃいけないことになってるの。」

「大丈夫、お兄さんにいい考えがあるんだ。それを使えば誰にも気づかれずに里をでて、森に行くことができるよ。」

（無事に帰れる保証はしないけど…。）

「……でも。」

「お父さんも娘の君たちが、自分のためにすることなんだからきっと許してくれるよ。むしろ褒めてくれるんじゃないかな。」

その言葉が決定的となり美希はその提案に乗る。

「…分かったわ、私も一緒に行く。」

「…お姉ちゃん！？」

真希は驚く。姉はお転婆で怒られることもあったが、それは故意じ

ゃなかったし悪気もなかった。なのに今、悪いことと自覚して行動しようとしている。

「真希ちゃんは一緒に来ないのかな？」

「…わ、私は…。」

彼女は戸惑う、姉の変化に、果たしていつも通りついて行っていいのか…。

「…真希ちゃんはお姉ちゃんのこと『頼りにならない』と思っているのかな？だったらしょうがないね、僕たち二人だけで果物を取ってくるよ。残念だけどその場合、果物を贈れるのも『僕たちだけ』になっちゃうけど仕方ないね。」

さっきまでとは違って彼の言葉にどこか冷たさが混じる。

「…お姉ちゃん頼りにならないかな？真希…。」

いつも自分に付いてくる妹が渋っている。そのことが姉を不安にさせ、美希は男の言葉を真に受けてしまう。

妹は姉の不安な表情を見て、焦る。大好きな姉にそんな風に思われたくない、思ってほしくない。そして、もし一緒に行かなかった時、自分一人だけのけものされて、贈り物をできない姿を想像してしまう。

「…行く。…私も一緒に連れて行って。」

だから、この選択はある意味当然と言える。

「二人とも家族思いだね。…それじゃ明日の辰の刻（午前８時）に、南門の少し手前にある井戸に集合してくれるかな？」

「辰の刻に南門の井戸に集合…、分かったわ。」

真希も首を縦に振る。

「くれぐれもお父さん、お母さんに見つからないようにね。」

それじゃ、また明日。男はそう言って手を振りながら寺子屋に帰って行った。

「お姉ちゃん、ホントに大丈夫なの？」

「大丈夫よ、あんな情けない奴でも大丈夫だったんだもの。」

姉妹は明日のことに一抹の不安を覚えながらも、家路に着いた。

寺子屋に帰ると部屋の真ん中に、正座をして待っている上白沢慧音がいた。

表？回目

Ｓｉｄｅ　上白沢　慧音

……寺子屋の戸が開き通武手（つぶて）が帰ってきた。

「おかえり…。」

私は今どんな表情をしているのだろうか…。

「た、ただ今戻りました。」

彼が無事に帰ってきてくれたことによる安堵の表情か…

「飯はどうする？」

頼られなかった自分の不甲斐なさに対する怒りの表情か…

「えっと、もう外で済ませてきました。」

「…済ませた？おまえ、幻想郷のお金を持っていたのか？」

今日は一緒に私の家で食べようと思っていたのだが…

「いえ、持ってませんけど。人里を回っている途中偶然、門番の真悟に会って、そばを奢ってもらいました。」

通武手は嬉しそうな表情をしている。

真悟、ね。随分仲良くなったみたいだな。

「…そうか、良かったな、真悟『は』頼れる人で。（訳：私はどうやら頼るに値しないらしい。）」

自分でも分かるくらい言葉に棘を感じる。

「ど、どうしたんですか上白沢さん？なんだか怒っているような…。」

私の様子がおかしいと彼も感じたのだろう。

「別に怒ってなどいない。」

心配そうにこちらを見ている。

「…そうですか。あ、それでそばを食べたあとなんですけど、『真悟』に色々案内してもらったんです。とても楽しかったですよ。『上白沢さん』も言いましたけど、あの人は『とっても頼りがいがあって』いい人ですよね。」

おそらく話題を何か振ろうとしたのだろうが、今の私にとってそれは火に油を注ぐそうなものだった。

「…そんなに、……そんなにアイツがいいなら…。」

自然と声が震える。

「か、上白沢さん？」

…どうしてアイツのことは名前で呼んで、私のことは慧音と呼ばないのか。

「博麗神社には真悟に連れて行ってもらえ！！そっちの方がおまえも良いんだろ！？」

こんなに大きな声を出したのは妹紅を本気で叱って以来だ…。

これじゃ、どっちが大人か子供か分かったものじゃない…。

「…何か嫌なことでもあったんですか？」

優しく彼は問いかける。

分かってる、分かってるんだ。これは自分自身の未熟さのせいだってことぐらい。だから、そんな目で私を見るな…。自責の念で押し潰されてしまう…。

「体調が良くないなら、家に帰ってゆっくり休んでください。…博麗神社の件は明日のお昼以降にでもゆっくり決めましょう。」

そう言って彼は私に手を伸ばし、起き上がらせようとする。

……バシッ

なのに、私はその手を払いのけてしまった。

「…あ。ち、違うんだ、今のは、その…。」

「大丈夫ですよ、僕がいけないんです。ちょっと馴れ馴れしかったですね。」

つぶては少し悲しそうな顔で、私が払いのけてしまった手を後ろに回した。

「「……。」」

互いに気まずくなり、この場の空気が重くなる。

「あーっと、それじゃ申し訳ないですが今日も僕は奥の部屋で休ませてもらいますね。」

おやすみなさい、そう言って彼は奥へと歩いて行った。

そして、私は一人ポツンと取り残されてしまう。

「何をやっているんだ、私は…。」

勝手に嫉妬して、勝手に傷つき傷つけた。

…だけど、このままじゃいけない。

……よし、落ち込むのはここまでだ。

「明日、ちゃんと謝ろう。博麗神社にも私が連れていく、そして必ずアイツを元の世界に帰らせてやる。」

私は立ち上がり、奥の部屋の戸を一瞥して決意を固め、自分の家へと戻って行った。

翌日、私はまた寺子屋で手紙を見つけた。

『上白沢さんへ　短い間でしたがお世話になりました。あれから自分で考えて、やっぱり先生には迷惑をかけられないと感じました。博麗神社には一人で行くことにします。幻想郷では貴重なものと聞き、喜んでもらえればと思いこれを置いて行きます。お礼とお詫びになることを…。　つぶて』

その手紙の上には梨の花と実がひとつ置いてあった。

表?回目（後書き）

梨の礫（つぶて）…まるっきり音沙汰のないこと
つまり、まぁこれ以降連絡が取れないことを主人公は暗喩している。
…ごめんなしぃ、これが作者の伏線の限界
ちなみに梨の花言葉は「博愛」「愛情」
自分的には慧音に合っているんじゃないかと。

裏？回目

辰の刻（午前８時）　南門

男は少女たちが来るのを待っていた。

（…さすがに３日間何も飲まず食べずは少しきついものがあるな。）

軽いめまいを振り払うために頭を左右に振る。

彼が昨日、慧音と微妙な関係になったのもわざとだった。門番などに会ってなどいないし、そばも食べていない。

その理由が一人で博麗神社に行くふりをするため、これで彼女は男を追ってきたとしてもそれはこの南門ではなく東門に向かうからだ。

そして、彼はできるだけ幻想郷の食べ物を口にしたくなかった。

（…どんな影響が出るか分からないからな。それにしても、朝からご苦労なことで…。）

彼は妖怪の賢者がいるのを『感じて』いる。

（…ちょっと面倒になったが、まぁバレないだろう。）

「…私たちより早く来るなんてなかなかいい心がけじゃない。おはよう。」

「…おはようございます。」

いつの間にか、少女たちが男の目の前に来ていた。

「おはよう、ちょうどいい時間に来てくれたね。」

互いに朝の挨拶かわしていると門番の交代の時間になったようだった。

「夜勤おつかれさま。交代の時間だ、もう帰っていいぞ。」

「お疲れ様です。それじゃ自分は帰らせていただきます。」

交代が終わり、もう一人の門番が帰っていく。

男はそれを確認すると少女たちにお願いする。

「美希ちゃんに真希ちゃん、あの今、門を守っている人に話しかけてくれないかな？」

「な！？そんなことしたら、すぐに家に帰らされるわ！？」

「……帰らないといけなくなる。」

「大丈夫。その辺はちゃんと考えているから。」

その言葉に彼女たちは渋々門番に話しかけに行く。

「××さん、おはようございます。」

「…おはようございます。」

話しかけられた門番は驚いた様子だった。

「あれ？真悟さんとこの娘さんたちじゃないか。どうしたんだい、こんな朝早くに？今日は真悟さんの誕生日だからお仕事は休みってのは知ってるだろうし…。」

「それは、えっと…、ちょっと用事があって…。」

「用事？いったい何か…ん？」

門番が美希に事情を聞こうとすると誰かが自分の左肩を叩くのを感じ、振り向く。

彼が意識を保っていたのはそこまでだった。

男は門番が振りむくのに合わせて顎の先端に右ストレートをいれた

からだ。

彼の脳はまるでピンボールのように揺れ、振動衝突を繰り返し典型的な脳震盪の状態を作りだした。

さらに、通武手は彼が足から崩れたのでその落ちる重力を利用し左アッパーを下顎へ…。

すでに意識は分断されていた、だがダメ押しのアッパーによって彼はさらに遠い世界へと旅立った。

この間、1秒にも満たない。

人影の少ない朝の人里、この光景を見られることはなかった。

「…っと。こんなもんかな?」

少女たちが茫然としている間に男は門番を門に立つように固定させる。

特に話しかけなければ、彼が気絶していることに気づくのは難しいだろう。

「あ、あんた何してるのよ!?」

美希は硬直から復活して、詰問する。

「何って?見ての通りだけど…。あぁ君達が話しかけたことなら門

番は覚えていないと思うよ。それぐらい良い感じに入ったから。」

「…そういう問題じゃなくて。」

「……？それよりも、早く森に向かおう。四半刻（３０分）もすれば着くからね。」

（…なんだか少し不気味だわ。）

ここで美希は初めて疑問を感じた。果たして、この男を信用してもいいのだろうか？と。

…だが、もう遅い。

彼らは人面樹の森へと向かい始めた。

裏?.回目（後書き）

まぁ、バキですね。…というかチルノ出したかったｏｒｚ

表十回目

Ｓｉｄｅ　真希

里を出発してだいたい半刻（１時間）経ったと思う。

私たちは今、お兄さんと一緒に人面樹の森を歩いている。

森はとても静かで、小鳥の囀り（さえずり）さえ聞こえてこない。

まるで生き物が私たち以外いないようだった。

ザッ…ザッ…

唯一聞こえてくるのは私達の足音だけ。

太陽の光も大部分が木の葉に遮られていて、辺りは朝とは思えないほど薄暗い。

「ねぇ、まだ着かないの？」

お姉ちゃんがつぶてさんに尋ねる。

「う～ん確かここら辺だったと思うんだけど…。」

そう言って茂みの奥にどんどん進んでいくお兄さん、私は着いて行くので精一杯だ。

「……お！？あったあった。美希ちゃんに真希ちゃん早くこっちにおいで。」

彼はおいでおいでと手を振っている。

「ったく、ホントに見つけたんでしょうね…。」

お姉ちゃんはそちらに歩き始め、私も後に続く。

うっそうとした草木を抜けると、少し開けた場所に出た。

そこにはお兄さん、お姉さん、そして……

「ようこそ、お嬢さん方、我が森へ。」

人面樹がいた。

「惨たらしく殺される覚悟はできておるかの？」

「え？…ど、どうして？」

お姉ちゃんは驚いている。もちろん、私もだ。

「…ひ、人里の人間は襲っちゃいけないのよ！」

泣きそうになりながらお姉ちゃんは反論する。

「それは人里の中での話、規則を守れぬ人間には関係のないことよ。」

こ、怖いよ…

「ちゃんと決めておったじゃろう？この森に入っていい日を…。主らはそれを破った。」

「それはコイツが大丈夫だって言うから！？」

「おぉ、そうじゃった。おぬしもご苦労じゃったな。よく人里から子供を二人、それもおなごを連れてきてくれたな。」

人面樹は明らかにお兄さんのほうに向かってその言葉を吐く。そし

て私達は詰問する。

「どういうことなの！？」

「…どういうことですか？」

すると、お兄さんはひどく狼狽し始めた。

「そ、それは…。」

「こやつはのワシと取引しておったのじゃ。自分と大切な者の命とを引き換えに人里から子供を攫ってくるという取引をな。」

「や、やめろ…言うんじゃない…。」

ショックだった…。まさかお兄さんがそんなことをしてたなんて…。

「…優しい人だと思っていたのに。」

「…最低ね。」

私達の言葉に肩を震わし始めたお兄さん。

「……るさぃ。…うるさい。うるさい！うるさい！！うるさいんだよ！！お前らに俺の気持ちの何が分かるっていうんだ！！」

「…ひっ。」

「な、何よ！？」

突然の大きな声に委縮してしまう私達。

「おい、人面樹！早くこのガキどもを殺してしまえよ！！」

そして彼女を返してくれ…

小さく呟いたお兄さんの顔はすごく辛そうだった。

「そうじゃのぅ、じゃが一体『どれ』から手をつけたものか…」

こちらを見て厭らしく笑っている。

「…よし、決めた。まずはこやつから殺すかの。」

そう言って、人面樹は蔓(つる)を操って、何か小さな箱を取り出した。

「おい！！ちょっと待て！約束が違うじゃないか！？」

「約束？そんなものは破るためにあるに決まっておろう。なぁに、

おぬしは世話になったからな一番最後に殺してやる。その方が絶望を感じることができるじゃろ？」

「そ、そんな…。それじゃいったい何のために僕は…」

お兄さんは膝をつき、項垂れる。

「…真希、アイツらの注意がそれている今のうちに逃げるわよ。」

お姉ちゃんがいつの間にか私の隣の来ていて、小声で提案する。

「…お姉ちゃん。…分かった、それじゃ。1、2の3で逃げよう。」

私も小声で返す。

「1。」

人面樹はまだこちらに気づいていない。

「2の。」

下半身に力を入れ、『地面を蹴る』準備をする。

「「3……！？」」

私達が地面を蹴った瞬間、天地が逆転した。

「おやおや、逃げようとするなんて困ったお嬢さん達じゃ。」

「な！？そんな…いったいなんで…。」

「…気づいてなかったはずなのに。」

蔓で空中にぶら下げられてしまった私達。

「さぁてなんじゃろうなぁ？…それよりも、困った子にはお仕置きが必要じゃのう。」

「！？…この、下ろしなさいよ！！」

お姉ちゃんが暴れている。私もなんとかして蔓を外そうと必死だ。

その拍子に…

……ポトッ

お父さんへの大事な手紙が懐から落ちてしまった。

裏十回目

Ｓｉｄｅ　人面樹

「そ、そんな…。それじゃいったい何のために僕は…」

くく、その絶望した顔が見たかったのじゃ。

大切な者は返ってこず、人としても地に落ちた。

これを絶望と言わず何と呼ぶ？

…おや？おやおやおや？

どうやら気づかぬうちに獲物が逃げだそうとしておるの。

しかし、ワシの森で地に足が着いている限りそれは不可能。森全体に張ってある根がそれを許さない。

おなごたちが地面に力を入れ蹴った瞬間、蔓で空中に吊り下げる。

「おやおや、逃げようとするなんて困ったお嬢さん達じゃ。」

「な！？そんな…いったいなんで…。」

「…気づいてなかったはずなのに。」

「さぁてなんじゃろうなぁ？…それよりも、困った子にはお仕置きが必要じゃのう。」

「！？…この、下ろしなさいよ！！」

暴れても無駄じゃ、それはそう簡単には切れぬ。まして子供なら尚更じの。

…ポトッ

それでも抵抗をやめぬ二人の懐から何かが落ちた。

「あ！？」

「…あ。」

ワシはそれをツタで拾った。

「これは一体何かの？」

「返してよ！それはお父さんへの大事な手紙なの！勝手に触らないで！」

「……返して。」

……ふむ。

「お主ら、今の状況を分かっておるかの？ワシは今からお主らを殺

そうとしておる。手紙など気にしている場合じゃないかの？」

「うるさいわね！私達はあんたなんかに殺されるつもりはないわ！」

「…お家に帰る。」

声が若干震えておる。

「気の強い娘たちじゃの。気に入った！機会をくれたやろう。」

「…機会？」

「そう、お家に帰れる機会じゃ。…なぁに簡単なことをすればいいのじゃ。」

「…何をすればいいの？」

「互いに殺し合え。生き残った方を里に帰してやる。手紙も返してやるぞ。」

そう言って、地面に下ろしてやる。

「な！？そんなことできるわけないでしょ！？」

「…絶対にしない。」

頭に血が上っていたのか少々足元が覚束ないがはっきりと拒絶する彼女ら。

まぁ、当然の反応じゃな。……だが

「しないなら、今すぐワシがお主らを殺すだけじゃ。…そう考えると一人帰してやるワシって優しいの。」

「「……。」」

おなごたちは顔を見合わせる。……せいぜいじっくり考えるがよい。

「手紙は2つとも返してやろう。それが父親への最後の言葉…泣けてくるの。」

人面樹の言葉が聞こえているのかいないのか、少女らはしばらく無言だった。

「真希…。」

「お姉ちゃん…。」

彼女らは何かを決心したようで人面樹の方を見る。

「どうやら覚悟はできたようじゃな。それじゃあ、これを使って殺し合うのじゃ。」

ワシは能力で3尺（1m弱）の木の杭を2本生成し、おなごたちの前の突き立てる。

しかし、少女たちはその場から動こうとしない。

「…どうした？早くそれを手に取るのじゃ。そうしないと殺し合えないじゃろ？」

「「……しぃ。」」

「…？何か言ったかの？」

「「私達は殺し合ったりしない！！」」

力強く少女たちは答える。

「……本当にそれで良いのか？このままじゃ二人ともワシに殺さ

れるだけじゃぞ？」

「「それでも！私達はあなたの言うことなんて聞かない！！」」

その声に震えはもうない。

……その目、つまらんのぅ。

「…そうか、なら仕方ないの。」

…ワシはもっと楽しみたいのじゃ。

「そこの男にお主らを殺してもらおうか。」

…そのためには何でも利用するぞ？

「……。」

男は無表情で人面樹を見ている。

人面樹はそれを絶望のあまり何も感じなくなったと判断した。

「どうしたのじゃ？殺さぬなら殺してしまうぞ？」

そう言って、人質である『モノ』を男の目の前にぶら下げる。

「惨たらしく殺してくれたら、今度こそお主らを助けよう。約束じゃ。」

「……。」

その言葉を聞いて男は少女たちの方にゆっくり歩いて行く。

「…な、何よ！あんたなんか怖くないんだから！！」

「……。」

「…お、お兄さん？」

「…。」

男は無言のまま彼女らの前に刺さっている杭を1本引き抜く。

「ふふふ、なかなか素直じゃな。せいぜいワシを満足させてくれ。」

とうとう美希と真希の所に辿りつく。

「おぬしはどっちから殺すのじゃ？姉か妹か？どっちじゃ？」

おお、杭を振りかぶって……

……地面に突き刺した？

次の瞬間、人面樹は四方を『木々』に囲まれ、視界を塞がれた。

表十一回目

人間も妖怪も思い通りに動かすのは難しい…。

男はそんなことを考えながら少女たちに近づく。

（せっかく、彼女らを殺そうとする状況に誘導したのに…。）

はぁ…と内心溜息を吐きながら、刺さっている杭を引き抜いた。

（別に人面樹自体はどうとでもなるんだが…。…問題は姿を現していないがこちらを観察している八雲紫。）

確実にアレ（人面樹）を殺すことができる場面を窺（うかが）っているのと、こっちがどう行動するかを楽しんでいるんだろうな…。

確かにその状況を作ることはできる。…だが後で確実に『面倒なこと』になる。

男は考える。なんとかして『妖怪の賢者』に『バレず』に済む方法を…。

（……ダメだ、腹が減って頭が回らない。）

……仕方ない…か。

手に持っている杭の『感触』を確かめ、振りかぶり…

…ザクッ！！

地面に突き刺し、『能力』を発動させる。

人面樹の周りに木々を『生やし』、視界を塞ぐ。さらにツタを『操り』少しの間だけだが相手の動きを封じる。

「なに！？これはワシの！！」

男はそんな言葉は気にも留めず少女たちの額に手を触れ、意識と無意識の『境界を操り』気を失わせる。

そして、彼女らを両脇に抱え、その場を離れる。

もちろんこのままでは人面樹には彼らの居場所が知られたままだ。

そうならないために、彼は先ほど生やした木々の『根』を半径数百メートルに張り巡らせ『動かす』。

（これで八雲紫を動かすための第一段階が終わった。…けど、彼女にはどんな『能力』かだいたい知られてしまっただろうな。）

『植物を操り』　『境界を操った』

そう、彼が使った能力それは……

『あらゆる能力を模倣（マネ）する程度の能力』

表十一回目（後書き）

改行でごまかせないほど短い…。連投しますかね。
能力について詳しい事は次話で明かします

裏十一回目（前書き）

今日2話目の投稿です。読む順番にご注意を。

裏十一回目

男が『違和感』を感じたのは人面樹に襲われた時。

『違和感』は林檎を一口齧ったら『疑問』に変わった。

その『疑問』は八雲紫と話して『確信』となり…

人面樹の森で一夜を明かし人里に向かう途中、『確信』の『核心』が彼の頭の中に浮かび上がった。

『あらゆる能力を模倣する程度の能力』

さらにその能力を使う条件が入ってくる。

？　相手の能力の『名前』を知らなければ使えない。

？　？を満たしたうえで、自身がその能力を『五感』等（視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚、ｅｔｃ…）で感じなければならない。その機会が多ければ多いほど能力は使えるようになる。但し、最大で相手の限界の６割となる。

？　相手の『許可』をもらえれば限界値は8割となる。

？　能力は『同時』に3つまでしか使うことはできない。

？　相手を自身の手で『殺した』場合限界値はなくなり、同等もしくはそれ以上の能力を発揮できる。

（便利なんだかそうじゃないんだか…。）

男は試しに八雲紫が使っていた『境界を操る程度の能力』で空間を裂こうとする。

空間は見事に裂け、彼女がしていたようにそれで移動しようとする。

……が右手は弾かれ持っていた梨だけが空間に呑み込まれてしまった。

（さすがに『視覚』だけじゃ使えないか…。幻想郷に気絶させられて、連れてこられたのは痛かったな。……『物』は自由に出入り

させることはできるみたいだな。）

何度か梨を空間に出入りさせ確認する。

（あと確認したいのは人面樹の『あらゆる植物を操る程度の能力』がどれくらい使えるかだが、この森で使ったらバレルから無理だな。視覚、味覚、触覚で感じているからかなり使えるとは思うが…。）

ここでできることはもう無い、そう判断して男は再び人里に向けて歩き出した。

彼は人里に着くとさらに、相手が能力を使っていると自分もそれに気づくことができると、八雲紫が現れたことで分かった。

また、慧音に梨の花を生成し贈ることで人面樹の能力も使えることを確認した。

人里から人面樹の森に出発する時、門番の意識と無意識の境界を操ることにより能力で自分がされたことならそれが能力の中でも難しい事でも、ある程度簡単にできることも試した。

そして、現在…

「なんじゃ、抵抗せぬのか？殺してしまうぞ？」

男は四肢を拘束され、杭を突き付けられていた。

裏十一回目（後書き）

視覚と触覚が襲われた時、味覚が林檎を食べた時。意識と無意識は最初、外の世界から連れてこられた時。

表十二回目

Ｓｉｄｅ　人面樹

…能力持ちか、やってくれたの。

人面樹は自分を拘束しているを引き千切る。

どうやら、ワシと同じような能力みたいじゃが、その『質』はワシの方が上じゃの。

「この森でワシから逃げられると思うてか？…森に張ってある根を感知すれば……」

……なんじゃこれは？何故こんなに動くものがある？

森には男が張り巡らした根が動いていた。

人面樹は少しの間混乱してしまい、目の前に生えてきた木々が原因だということに気づいたのはしばらく時間が経った後だった。

「……っち。これが原因か！？」

人面樹の能力で彼が生やした木々は一瞬く間に枯れ木になり根は動かなくなった。

何も動くものはないの…。

……じゃがどんなに急いだとしても森をでるまでには至っていまい。

「いつまで動かないで耐えることができるかの？せいぜい追われる恐怖に怯え、ワシから逃げようとしたことを後悔するがよい。」

そう言ってゆっくりと森を散策し始める人面樹。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

……見～つけた。

僅かだが動いたな？

一瞬だが油断したな？

それが命取りじゃ。

ワシが動きを感知した場所に行くと二人のおなごが一本の木にもたれかかっていた。

気絶しておるのか？それに男の姿が見えぬ…。

…だとしたら、これはワシをおびき出すための罠じゃろうな。

おなごらは囮の可能性が高いの。

逃げることはできないと理解して、ワシを退治しようとするなど片腹痛いがの。

……まぁ、乗ってやろではないか。お主の能力の質じゃたかが知れておるがな。

人面樹は少女たちに近づく、そして彼女たちに触れようとした瞬間…

ドスッ！

「ぬ！？」

彼女たちがもたれかかっていた木から杭が飛び出し人面樹を貫いた。

…なるほど、なるほど。

だが、これ（杭）で貫いたとしてもワシを殺そうとするのは無理じゃな。

軟弱な策は自身の身を滅ぼすぞ？

ワシが逆におぬしをおびき出してやろうぞ。

「ゴホッ！ゴフッ！…ゆ、油断してしまった。まさか、人間にワシがやられるなんて…。」

人面樹がその言葉を吐いて動かなくなった振りをすると、男がその木から飛び降りてきた。

「……やった…のか？……た、助かったー！！」

…ふふふ

「残念だが現実は非情じゃ。」

「！？」

ワシは男が何か言う前に、荊(いばら)で四肢を拘束し空中にぶら下げる。

男自身の体重で荊は彼の肌に食い込み、出血し始める。

「どうじゃ？なかなか痛いじゃろ？」

男は顔を少し歪ませながらも人面樹に尋ねる。

「何故生きてるんだ？確かに貫いたはずなのに…。」

くくく、そう思うのは当然じゃろうて。

「それはの、ここがワシの森だからじゃ。ワシがここで地に根を張っている限り…。」

ワシは最後まで言わず、体に刺さっている杭を引き抜く。

「空けた穴が…。」

男が空けた風穴は見る見るうちに塞がっていった。

「そういうわけじゃ。つまり、この森にいる限りワシは死ぬことはない。」

ガックリと項垂れておるの。

「ところでお主よ、ワシはやられたことはやり返さないと気が済まないのじゃが…。」

「…それは一体？」

「こういうことじゃ。」

ワシは杭を生成して、男の心臓に突き付ける。

しかし、男は俯いたまま何の反応も示さない。

「なんじゃ、抵抗せぬのか？殺してしまうぞ？」

抵抗しても殺すだけじゃがの…。

「…もう遅いだろうが、一つ忠告しておこう。今の自分には生かすだけの価値があることを理解しておいたほうがいいぞ。」

男はまるで、明日の天気の話でもするかのように話し始めた。

「何を言っておる。おぬしはおなごらを連れてきた時点で生かす価値は無くなったぞ？」

彼は構わず話し続ける。

「それと生き物が生理現象以外で、油断が大きくなる時は知ってい

るか？」

拘束している荊の力を強めるがそれでも反応がない。

「やれやれ、恐怖で気が狂ったかの？」

…そんなものを甚振(いたぶ)っても面白くないわい。

「あぁ…最後に…」

「もうよい…さっさと死ね。」

人面樹はつまらなそうに杭を振りかぶり男の心臓に突き立てようとした。

「…が！？は！？…な、なんじゃこ、れ…は！？」

しかしそれは叶わず、人面樹は体の上半分が切り『離され』…

「最後に…やられたらことはやり返す。それは僕も同じです。八雲さん貴方もそうでしょ？」

荊で上半分を拘束され、『空中』にぶら下げられていた。

「…そうね。それについては同意見だわ。」

裏十二回目

Ｓｉｄｅ　八雲　紫

何かの能力には目覚めているだろうとは思っていたけど…

八雲紫は男が植物を操り、子供たちを気絶させ移動するのを見ていた。

……私や人面樹の能力を真似て使うことができる能力。

境界を使って移動しないところを見ると何かしらの制限があるみたいだけど…。

確かにそれでも私に知られるワケにはいかなかったでしょうね。

だってそんな便利な能力が使えるなら私は貴方を式にして、外の世界には帰してあげないもの。

貴方も利用されるのが分かってたから隠してたんでしょ？

それなのに能力を使ってしまった。何故かしら？彼ならあの状況でも口八丁で切り抜けられたでしょうに…。

私は疑問に思いながらも少女を両脇に抱えて走っている彼の後について行った。

少し開けた場所で彼は止まり、木を一本生やすと少女らを降ろし、その木に登ってしまった。

そんなあからさまな罠を張ってしまってどうするの？いくら人面樹が愚かと言ってもそれじゃ気づかれるわよ…。

八雲紫も彼の行動に少し戸惑っていた。

暫く経って人面樹が現れ、彼女らに触れようとする。

ドスッ！

「ゴホッ！ゴフッ！…ゆ、油断してしまった。まさか、人間にワシがやられるなんて…。」

…見事に杭が貫いたわね。だけど、その下手くそな演技…死んでない？

「……やった…のか？……た、助かったー！！」

なのに彼は人面樹の前に姿を現す。今度こそ殺されるわよ？

「残念だが現実は非情じゃ。」

案の定、捕まる彼。荊で拘束されてるからかなり痛いでしょうに…。

「どうじゃ？なかなか痛いじゃろ？」

彼の顔が少し歪む。

……。

「何故生きてるんだ？確かに貫いたはずなのに…。」

……それは私も気になるわね。普通は死ぬか少なくとも重症の怪我だったはずよ。

「それはの、ここがワシの森だからじゃ。ワシがここで地に根を張っている限り…。」

「空けた穴が…。」

…治っていくわ。

「そういうわけじゃ。つまり、この森にいる限りワシは死ぬことはない。」

…項垂れているのは演技なのよね？

「ところでお主よ、ワシはやられたことはやり返さないと気が済まないのじゃが…。」

だけど、貴方はいったい何が目的なの？

「…それは一体？」

私に何をさせたいの？

「こういうことじゃ。」

…心臓に杭を突き付けられてる男。

「なんじゃ、抵抗せぬのか？殺してしまうぞ？」

……私は同情で貴方を助けたりしないわよ？

「…もう遅いだろうが、一つ忠告しておこう。今の自分には『生かすだけの価値』があることを理解しておいたほうがいいぞ。」

……なるほど、そういうことね♪

「何を言っておる。おぬしはおなごらを連れてきた時点で生かす価値は無くなったぞ？」

つまり、人面樹にとってでは無く私にとってはあるのね。

「それと生き物が生理現象以外で、油断が大きくなる時は知っているか？」

「やれやれ、恐怖で気が狂ったかの？」

それは自分が有利な立場にいると思っている時。

獲物を殺そうとする時。

今の貴方（人面樹）って分かっていないのね。

「あぁ…最後に…」

だから、彼はこの状況を造った。私は、子供でこれが起きることを望んでいたのだけど…。

彼を生かす理由ができたから。

…いいわ。少しくらいなら利用されてあげましょう。

「もうよい…さっさと死ね。」

アレ（人面樹）が杭を振りかぶった瞬間、能力を使い…

「…が！？は！？…な、なんじゃこ、れ…は！？」

『空間』を裂く。

すかさず彼はアレが再生できないように、荊で『空中』に吊り下げる。

「最後に…やられたらことはやり返す。それは僕も同じです。八雲さん貴方もそうでしょ？」

それは、今ぶら下がっているアレに言ってるのかしら？

「…そうね。それについては同意見だわ。」

それとも、アレを殺すために貴方を利用した私に言ったのかしら？

表十三回目（前書き）

序章のエピローグ的なもの。ちょっと時間が飛んでますが気にしないでください。ちゃんと戻りますので。

表十三回目

Ｓｉｄｅ　上白沢　慧音

彼が里からいなくなって三日が過ぎた。

あれから私は手紙を見つけた後、東門へ急いだ。

しかし、東の門番に聞くと誰も通ってないという。

だから、人里中を探し回った。それでも見つからなかった。

彼を探している途中、お昼頃に美希と真希の両親と会った。

何故か凄く焦っているようだったので事情を聞いてみた。

娘たちが家からいなくなったらしい。

気づいたのは朝食に呼ぶ時で、それから人里を探し回っていたらしい。

寺子屋に来ていないかと聞かれた。

朝はいなかったがもう一度見てくると伝え、私は寺子屋に戻った。

彼も戻って来ているかもしれないと思った。

そこにいたのは美希と真希。

そして、妖怪の賢者だけだった。
そこで私は思い知らされた。
私は彼のことを何も知らなかったことを…

「……！？美希！真希！しっかりしろ！」
寺子屋に帰ってくるとそこにはぐったり倒れている彼女たちがいた。
「今、医者を呼んでくるからな！」
「その必要はないわ。ただ気を失っているだけだもの。」
私が里の医者を呼びに行こうとしたら、突然声をかけられた。
振りかえるとそこには見知らぬ女性が立っていた。
「誰だお前！この子達にいったい何をした！？」
「私はこの子たちをここに運んだ『だけ』よ。感謝されこそすれど、恨まれる覚えは無いわ。」
胡散臭い雰囲気の彼女は私の怒気を気にすることもなく言う。

「運んだ？彼女らはいったい何処にいたんだ？」

「人面樹の森。」

「な！？どうしてそんな危険な所に…。」

その言葉に彼女は失笑し、私を小馬鹿にする。

「『何も』知らないってのは本当に滑稽ね。」

私は若干いらつく。

「…どういうことだ？教えろ。」

ふぅ…っと八雲紫はため息を吐き、慧音の側に寄り、耳元で囁く。

「別に構わないけど、それは毒林檎かも知れないわよ？」

「……毒を食らわば皿までだ。」

私の返事を聞き彼女は話し始める。

その内容は信じられない、いや、信じたくないものだった。

「通武手が美希と真希を騙して森に連れていった？」

…どうやって？

「そう、お父さんの誕生日に珍しい果物を贈るっていう餌を吊り下げてね。」

…何のために？

「さらに言うなら、彼は自身の利益のために彼女らを人面樹に捧げたわよ？」

…自身の利益。

「嘘を言うな！それならどうして美希と真希は生きている！」

そうだ、彼女らが生きているならきっと彼は途中で改心して…

「それは私が『助けた』から。そうしなければこの子達は人面樹に殺されていたでしょうね。」

そんな…。

…ならどうしてお前はそんなことを知っている。

「……お前は一体何者だ？」

「八雲紫。人里を保護している妖怪って言ったほうが分かりやすい

かしら？」

「存在しているのは知っていたがお前がそうなのか…。私は…」

私が何か言う前に言葉をかぶせてくる八雲紫。

「上白沢慧音。寺子屋の教師。半人半獣。幻想郷の歴史を編纂しているのよね。」

「知っているのならそれでいい、一応の礼節を通そうと思っただけだ。それよりも聞きたいのは……。」

…声が出てこない。

「彼のことでしょ？その表情を見る限り想像はついてるでしょうけど。」

表情？今、私はどんな表情をしている？

「通武手、という人物はもうこの幻想郷にはいないわ。言わなくても分かるだろうけど私は彼を外の世界に帰していないし、博麗神社にも行っていないわ。そして私は幻想郷に害なすものを助けるほどお人よしではないわ。…『人』ではないけれど。」

…美希と真希はここにいて、彼はいない。それはつまり…。

彼は死んだ、とういうことで…

いや、正確には……

それを理解した瞬間私は八雲紫の胸倉を掴む。

「どうして彼を見殺しにした！！お前なら助けることだってできただろう！？」

「あら？どうしてそう思うの？」

「この子達は助けることはできたんだ！どうして彼は助けなかった！？」

「…言ったでしょう？幻想郷に害なすものを助けるほどお人よしじゃないって。…彼は何をしたの？」

自己の利益のために人里から子供を騙して攫ったのよ？

「そ、それは…。だけど彼にも事情があったはずだ！」

しどろもどろになりながら反論する慧音。

「それは何？知らないでしょ？……結局のところ貴女は『何も』彼のことを知らなかったの。」

その言葉が私の胸に突き刺さる。

「……。」

黙っていると彼女は人差し指で私の頬をそっと撫でる。

「だから、別に貴女が泣く必要なんてないのよ。」

「え？……あれ？」

言われて初めて気づく、どうやら私は泣いているらしい。

「美女に涙は映えるけれど、貴女のそれにはどんな意味が込められているのかしら？」

彼が死んだことに対する悲しみか、それとも彼を理解してやれなかった悔しさか…

ポロポロと、とめどなくなく溢れてくるそれを止める術（すべ）を、私は知らない。

「……それじゃあ、私はもう行くわ。そろそろこの子達も目が覚めるだろうし。そして、これは彼女たちへのお詫び。」

八雲紫は手紙を二枚と山盛りの果物をスキマから取り出し、その中に入っていく。

「あぁ、そうそう最後に一つだけ彼から伝言を頼まれていたわ。」

すでにスキマの中にいる彼女は振りかえり、それを慧音に伝える。

「……おにぎり、歪(いびつ)だったけどおいしかったって。」

確かに伝えたわよ、そう言って紫はスキマを閉じた。

……ゴソゴソ

「…あれ？けーね先生？どうして？」

「……けーね先生？」

どうやら、美希と真希が目を覚ましたようだ。

それから二人に事情を聞いてみたが、やっぱり八雲紫の言っていたことは事実だった。

彼女らが言うには彼も何か辛そうな様子を見せていたらしい。

真悟はとんだ誕生日になってしまったとぼやいていたが娘の無事が確認できて安心したようだ、彼については何も言わなかった。

人里にとってはちょっとした事件でも、私にとってはかなりきついものだった。

そして私は里のみんなが思うほど強くない…

だから、この毒林檎（歴史）を食べる（隠す）ことにした。

表十三回目（後書き）

慧音が再び出てくるのはだいぶ後になると思います。ちなみに紫は慧音との会話の中で１か所だけ嘘、というか矛盾している個所があります。答えは次話のあとがきで。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8635w/

東方表裏録

2011年10月12日12時58分発行